女鑑

明治三十三年七月五日發兌

第貳百八號

國光社

女鑑第貳百八號

目録

阿松の方



其の責任をつくせよ

鷄は刻を告ぐるを以つて能とし、猫は、よく鼠を捕ふる者を以つて良とす。若し夫れ、鷄に、鼠を捕ふる能はざるを責め、猫の刻を告げざるを嘲るが如きは愚者といへ、狂者といへども、猶且、爲ざるところなるべし。それ、斯くの如く、之を鷄猫に譬ふれば、愚者狂者だに惑ふことなきを、之を人々の實際の行爲に鑑みれば、鷄鼠猫刻相混じて、而かも、人これを怪訝まず。

彼の、所謂女權擴張論者の唱導するところ、實に、酷だ之の例に適せり。抑も、女子の本分を發揮し、其の責任を全うせしむることをつとめざるのみならず、其の本分を忘れ責任をすてゝ、所謂女權擴張論を唱導し、男子と駢馳せむことを庶幾する必要ありや。否や。斯くの如きは、畢竟内を卑み外を尊ぶところの頑迷不靈の輩の、神經のみ過敏にして理性のいまだ發達せざる、而かも、猜疑嫉妬の情ふかくして、常に、小さき野心をすつること能はざるところの少數の女子の弱點に

乘じ、巧に、挑發煽動するに因るものなりといへども、是れ即ち、猫をして刻を告げしめ鷄をして鼠を捕へしめむとするの狂愚にあらずや。而して、世人の、敢へて、之を怪訝まざるは何ぞ。

人は、男女各自に適應したる性質を有し、人々、また皆、おの〳〵盡すべき責務あり。故に、先づ必らず、其の天性に從ひて、其の責務を盡さむことを期すべきなり。而して、猶餘力あらば、鷄の鼠を捕ふるが如き仕事を企てむも不可なかるべく、猫の刻を告ぐる的の餘技に熱心せむも妨なかるべきなり。

現今の婦女子は、果して、妻として恥づるところなきか、母として、非常の缺點なきことを得るか、或は、和樂の泉源となりて、よく、家庭を圓滿ならしめ能ふべきか、或は又第二の國民を教導輔育して、あやまつことなかるべきか。這般の疑問に對しては、寧ろ、明晰に解答することの、甚だ禮を失するを憾む。故に、いはく、おの〳〵其の本分を守り、其の責務を全うせむことを努めよと。



論説

日本女子今後の覺悟（二十二）

三輪田眞佐子

加之人類以外の動物にても、無益に殺生する勿れ。近來肉食の流行となるのみならず、人体を維持するには、多少の肉食は、止むを得ざれども、目前にて殘酷なる殺生は、君子の忍びざるところなるべし。古人の庖厨を遠け、或は、釣して網せず、弋して寢鳥を射ざりしは、全く博愛の盛徳禽獸に及びけんを以てなり。されば、牛馬の如きも、殘酷に使用するは、不徳の行なれば、事情の許さん限り、親切に取扱はざるべからず。更に孔夫子の方長を折らずと言ふが如く、動物より以下の植物さへ、理由なく亂伐せざるを以て仁の深きものとなす。然るに、世には、殘忍を以て文化の常勢なりといふものあり。などかこれに雷同すべき。おのれは、上は君父師より、以下は魚鳥草木に至るまで、應分の順序を以て、仁惠を施すを以て、完全なる文明に達するものと思ふ。讀者、果して非とするか、是とするか、道心日に衰へ、人心月に危からん。今後は、仁義を唱ふる覺悟も、急務にあらずとせず。

他人に對する道は、ほゞ上に述つる如きものなれども、今後はいよ〳〵國家に對する女子の覺悟こそ必要ならめ。いでや、女子なりとも、國家の何ものたるを辨へざるべからず。思ふに、國民としいへば、固より男子と女子とを以て成立するものなるが、今業務上より、男女につきて差別せんか。

男子は主として、外事をつとめ、女子は主として内事をつとむるといへども、男子たりとて、内事を總て知らざるを以て良しとするにはあらず。女子なりとて、悉く外事を知らざるを良しとにはあらず、唯主とすると從とする相違あるのみ。されど、女子たりとも、國家に對する應分の任務なかるべからず。

先づわが、國家の大義を詳にせんとならば、國体と政体との差別を忘るべからず。國体とし言へば、萬世一系の君主を頂くをいひ、政体としいへば、立憲政治とか、共和政治とかにつきていふなり。元來、わが國体（くさも木もわが大君の國なればいづれか鬼のすみかなるべき）と古歌にあるごとく、神州の特有にして、世界無比なり。これに反して、政体よりいはゞ、武門政治の時代より、亦今日のごとく立憲君主政治の時代ありて、變遷なきにあらず。唯國體に於ては、萬古不易なれば、苟も、國民たるものは、女子なりとて、この區別な誤りそ。若しこのけぢめ明ならざれば、わが國の歷史を見て、不審なるのみならず、目下の國勢につきても、了解する能はざるに至るべし。

既に國民たる以上は、國家に對する義務なかるべからず。今、その主なる義務を擧げんに、第一國防の義務あり。凡そ國防の任に當るものは、直接に兵士なれども、女子は、間接にこれを、應援せざるべからず。すなはち、兵士の體質は、多く、母より遺傳するを以て、母たるものは、單に强壯の兒を擧ぐるは、子孫の幸と、不幸のみに關係せず、施いて兵力の强弱に影響すべければ、苟も國體を思ふ女子は、自ら體育に注意して、强質なる子孫を作らざるべからず。亦、一般國民の氣力も母の感化によること多ければ、母たるべき女子は、

愛國の熱情を注ぎて、國家の元氣を奮はしめざるべからず。今後、わが國は、世界の各國と對立して、威信を張るべき大任あれた、母たる女子は、力山を抜き、氣世を蓋ふ國民を作らざるべからず。

女子と衛生（四）

永井潜

第三　衣服の事

昔男ありけり。心いとかろ〴〵しくてなん郷社の祭の日に異樣なるなりして、人を驚さばやと思ひけん、全身に漆を塗りて、黒坊主となり、躍り出でんとせしに、塗ること半以上になりける時、俄かに樣かはりて、苦しみ悶えて死にたりとか。之によりて見るも、如何に皮膚なるもの丶大切なる働きをなすかを知るに餘りあらむ。前にも云へる如く、皮膚には、無數の毛穴ありて、之より、絶えず、老癈物を吐き、且つ水蒸氣を散じて、躰温の加減をなすものなり。去ど、運動をなしなば夏の如く、皮膚の血行盛かんなる時は、之等の排泄物は、多量にして、滴をなすに至る。之れ乃ち、汗なり。故に、之の時は、一方の泄排を司る尿の量は、減ずべく、冬の如き、寒冷にして、皮膚の血行少き時は、之に反するを見て。又發熱の時汗を出さしめて、熱を減ぜしむるも、之の理によるなり。去ば、垢を附けて、之の穴を塞くは、大に、害ありとす。之の外、皮膚は、觸感を司り、外表を包みて、毒物の侵入を防ぐ等、誠に、大切なる働きをなすものなれば、之をして健全ならしむる、樣常に心かくべきなり。

之の皮膚を直接に包みて、眞の用を助くるものは

衣服なり、飛ぶ鳥、走る獸も、天より授けられたる美はしき、衣服を着く、人は然らずして、自ら織り、自ら縫はざるべからず、衣服のこと、豈にゆるかせにすべけんや。

凡そ、衣服の働らきを擧ぐれば、次の如くなるべし。

一、よく躰温を保ちて、外に散せしめざること

二、躰より蒸散する瓦斯を容易く通過せしむること

三、外熱の直接に躰を犯すを防ぐこと

四、能く多量の水分を吸收して、徐々に之を蒸發せしむること

以上四つの、尤も完全に具ふるものは、毛織物なり。去れば、襯衣の如きは、殊にフラチルを以て、最上とす。リンネル等の如きは、熱を導くこと早く、隨つて温を保つの性少なし、又絹の如きは、

地質細かにして、第二の働らきをなすこと少なく且つ水分を多量に吸收すれども、一時に之を蒸發せしむる故に膚に寒冷を覺えしむ、之の點に於ては、木綿の方尚優れとす。故に、絹又たは、リンネル等にて襯衣を造るべからず。毛織物は、以上四つの性あるのみならず、尚毛を以て、絶えず皮膚を刺擊して其の血行を促がし、榮養を盛かんならしむ。其の外、容易く、バチルス等を其の間に促して、躰に侵入せざらしむる等、種々の利益あり。故に、平素風邪し易き人、充血に傾く人、神經衰弱の人等に對ひては、皮膚の蒸散を自由ならしめて、大に治療の功を奏することあり。且又氣候の變化し易き地にありては、欠ぐべからざるものとす。

茲に、大に注意を乞はざるべからざるものは、洗濯のことなりとす。抑、衣服には、塵埃に附着し、

或は剣落せる皮膚と共に、無數のバクテリアを宿すものなり。然れは、永く、洗濯を怠れる不潔なる衣服は、往々傳染病の媒をなすこと少なからず。夫の本年のペストの如きも、其の始めの病毒は、古綿に混じて入れるものとか聞く。殊に、毛織物の如きは、地質疎鬆なる故に之を宿すこと夥だしく、結核、疱瘡、痲疹等の諸病を媒することあり。故に毛織物にありては、殊に洗濯を屢行ふことを要す。一般に、西洋人に比すれば、日本人は、洗濯を怠りがちにして、一、二ヶ月も仝襯衣を着くるは珍しからぬ事とせらるゝは、誠に惡しき風俗と云ふべし。去れば、我は、呉々も、流行を逐ひ、綾羅を競ふの愚をなさずして、成るべく、衛生に適する衣服を造り、且つ其の費の一半をさきて、洗濯に意を用ゐ玉はむことを希ふなり。

お伽噺にて聞かることあり。或時、一羽の烏抜け落ちたる孔雀の羽を拾ひて、己れの翼に挿み、得意顔して歩みまはりければ、己れの仲間よりは追はれ、孔雀の群よりは嘲けられて、今更らに、己の無謀を悔みしといふ。あはれ、此の烏よ。徒らに、時流を追ひ過分の装をなす人々のよき誡にはあらずや。

女子の國家に對する義務（下）

岸田松二郎

（ハ）女子と國家的衛生

衛生的思想の發達は、國家富强の源因なり。古今東西に視るに、國の文野は、誠に、此の思想發達の程度と正比例をなせり。近來衛生の說、益、行はれ、男女を問はず、老幼を選ばず、國民全體の務めとなれり。國家は、個人の集合體にして、個人は、國家の分子なり。身體は、萬事をなすの根源なるが故に、國民の身體健全なれば、隨て、强

健なる精神を宿すべし。精神薄弱にして、身體孱弱なるもの相集りて、以て、國家を組成せば、如何ぞ進取の業をなさんや。

身體の健康は、實に衛生の賜にして、苟くも、之を忽諸に附するあらんか、其の害の及ぶ所、甚大なり。試みに見よ。明治廿七八年の戰役は、吾人同胞の均しく痛慮せし所にして、又環視者の眸を集めたりし大事なり。然るも、戰病死者の數を問はゞ、僅々數千に充たず。而して、常時傳染病の行はるゝや、未だ猖獗の勢を逞うするに至らずして、其の死者の數は、遙かに戰時の死者に勝れり。頻年虎列拉に赤痢に、將た、窒扶斯に、其の命を殞ずる者幾千なるを知らず。彼は、數千人の命を失うて、國威を八宏に輝かし、此は連年幾千、萬を失うて、何の償ふ所なし。啻に償ふべからざるのみならず、又、且國家の費用を糜し國家の生產力を失ふこと、少しとせず。然らば、則ち、傳染病の國家に於ける害毒の恐るべきこと、蓋、之より大なるはなし。されば、衛生事業は獨り個人の務むべきのみならず、又國家の務むべき所なれば、人々個々相聯關して、以て、身體の保全を計るべきは、是國家に對する責務の一なり。而して、一家の健康を計るは、專ら、婦人の務むべき所にして、又、鄕黨隣里相倚り、相助けて、以て、彼の恐るべき、傳染病の豫防を計るも、亦婦人の務むべき所なり。男子如何に能く、衛生の必要を說き、如何に能く衛生を重ずと雖ども、之が對手たる、婦人の思想にして、國家的衛生の闕如せば、恰かも、前面に、水を注ぎて、背後より、火を助くるが如けんのみ。





精華

公益

人は各、其の身の分に應じて、世間公共の利益を圖らざるべからず。而して、公益の事、其の目、甚多し。例へば、道路を開き、橋梁を架して、交通の便を圖り、溝洫を通じ、水利を興して、運輸に利し、大災に備へ、或は、曠野を拓き、赭山を林とし、或は、其の鄕土に産せざる動植物の種を得て、其の蕃植を謀り、或は、製作品の模型を得て、衆人に示し、或は、共有基金を作りて、事業を興し、錢財を捐てゝ、其の鄕土の利を謀る等、皆、是、公益にあらざるはなきなり。

昔、伊豫の杉山領内筒井村、作兵衛といふ農夫ありき。稟性、朴實にして、常に、其の業を勵みたり。享保十七年秋、螟災、大に起りて、穀物登らず。郡邑にも、救荒の政を施すに暇あらざりしかば、業を捨てゝ離散するもの、甚多かりき。作兵衛、獨、麥田の耕作の廢すべからざるを思ひ、奮然として、饑餓を忍び、自、數十畝を耕し、麥種を播せんとせしに、精力衰耗せしかば、狼狽して家に歸り、困頓甚しく、遂に、死に瀕せり。隣人、之を見て、作兵衛に諭し、『子の命既に危し。然るに、麥種、嚢中に滿ちたり。何ぞ、之を食ひて、死を免れざる』といへるに、作兵衛、怫然として、色を變じて曰はく、『吾食ふべからざる食を食はゞ、何ぞ、此に至ることあらん。夫、百姓の、穀種を施し、租稅を納るは、即ち、其の職なり。官庫の用も、之より取り、士大夫の祿も、之より

出で、國人の食も、之によりて足れり。されば、穀種の貴重なること、吾が命の比にあらず。民は、國の本にして、穀種は、農の本なり。もし、今、肆に、之を盡さば、來歳の國用は、何を以て給せんや。穀種を食はざるは、是、吾が志にして、竊に、以て、國に報いんとするなり。吾は、死を守らんのみ。復言ふこと勿れ』とて、遂に、種嚢を枕にして死せり。國人、其の義氣に感じ、稱して、義農といへりとぞ。

嗚呼作兵衛、小農の身を以て、窮厄の際に處し一身の利慾安逸を貪らずして、一國公衆後年の爲に、其の益を思ひ、死して、倘顧みず。其の義、實に、感ずるに堪へたり。古人曰く、私事を重んじて、公事を輕んずること勿れと。是、君子の難しとする所なり。而して、作兵衛、之をよくす。其の平素、深く、養ふ所あるにあらずば、いかでか、能く、此の如きに至らん。

今人、世益を圖るものなきにあらず、然れども、其の期する所、多くは、名を求め、譽を競ふにあるが如し。其の功、未擧らずして、先、名を衒ふが如きは、亦、唯、僞善の所爲たるに、過ぎざるなり。思はざるべからず。

武田晴信の女阿松の方

山本正周

武田晴信の女阿松の方といへるは、信松院ともいふ。八歳の時に織田信忠と婚姻の約束調ひけるが、十二歳になりける時故ありて、離縁し、兄信の家に歸れり。是より後は擧止言行、一に孀の如く、人々再嫁を勸めけれども、辭して從はず。かくて十八歳の時に一族滅亡に及びければ、妹

幷に、二人の姨と共に逃れて、栗原といへる里に匿れ、後また、武藏の安下山のほとりに身を忍ばせ、わびしく月日を送りけるを、或人、迎へて、妾となさんとしけるに、阿松の方は、固く拒みて、其の言に從はず、又、横山といへる所に移りて、さゝやかなる家を搆へ紡績などして、辛くも、其の日を送りけるが。後に舊臣某、之を聞き傳へて、尋ね來りて、之を養へり。終には、德川家康の耳に入り、月俸を賜ひければ、一生を安樂に送りしとなん。

とり女

吉野眞澄

頃は享保、三河國額田郡古部村に、とり女と云へるがありけり。家もとよりゆたかならで、老いたる父さへ病の床に臥しければ、醫藥を求むるよしなき有樣に立ちいたれり。孝心深きとり女のもの思ひ如何ばかりなりけん。こゝに、とり女は思ひを定め、曉にさきだち霜をおかし、薪を深山に採り、こを岡崎にひさぎて、その價をば療養の資にあてたり。古部より岡崎までは、三里餘もある道を男子もたへがたきほどの重荷をせおひて、比隣に行くがごとく通へるのみか、なほ、其の藥を求めむとて、七里もへだゝる池鯉鮒のさとまで往來するを、たゞ、咫尺の間の如くれもひなせり。其の心ばへ、まことに賞嘆するにたへたり。かくも勉めいそしみしかば、父母の着のもののみは、暑さ寒さの折々につけつゝ調へけり。されど、夜な〳〵、かづく衾のうすくして、ひまもる風におかされ、力無き咳のうちつゞくれば、とり女一人かなしみて、かれくさを集めて被かせ、あるは、自のはだ

へをもて、かはる／＼父母をあたゝめ、また、夏くれば、蚊帳のなきまゝ、樹葉をあみて扇とし、夜もすがら、ねもやらで蚊を驅りもて、父母に安眠せしむるが常なりきとぞ。これらいみじき行の、やう／＼時の領主に聞えければ、こよなくめでられて、歳ごとに三口の俸米を給はるゝとはなりぬ。かくて年もやゝ嵩みければ、獨身にてあるべからずとて、近親のねもごろにすゝむるまゝ、相應の夫を迎へて、今は心やすう世をおくる事とはなりけり。此に、とり女、君恩をかたじけなう思ひて、領主の卒せし時は、米薪を香華院に奉り、かつ、月ごとにまゐでゝ、奥津基所にぬかづけり。その後、また、領主より、とり女の父の典賣せる田畠山林を購ひかへし、永く租賦を免して、その孝行を旌表せられしとぞ。

世に孝子多しと雖も、とり女が如きはまれに見る所なり。さて、また、世には、孝女の獨身にて終るが多し。固より其の境遇にもよることにて、ひたぶるに、惡しゝとのみは云ひがたかれど、頑に有夫を嫌ふが如きは、決して賞すべき事にあらず。差したる支障だになくんば、相應の配遇をもとめて共々に孝養を盡さんことこそあらまほしけれ。とり女が如きは、實に、其の中を得たるもと云ふべし。

家政



女禮稽古の仕方

有住常子

餅菓子たべ様

ようかん、くず餅の類は、楊枝にて、四ッくらゐにおしきり、楊枝にさしてたべるべし。中に、あんのはいりたる物は、先、懐紙を出し、二ッ折にして左手に持ち、楊枝にさして取り、楊枝を置き、両手に持ち、紙ながらわりて、あんのこぼれぬ樣に、楊枝にさしてたべるべし。大豆粉餅の類は、盆を取り上げて、楊枝にてたべる物なり、又、干菓子のたべ樣は、前にかゝげし如くにてよし。何品にても五種七種ありとも、ことごとく取るは宜しからず。又、心にまかせ、度々取りてたべぬ物なり。種ある物は、紙に包みて懐中にすべし。

濃茶呑み樣幷に出し樣

濃茶は、先、帛紗を四ッ折にたゝみ、其の上に茶椀を据ゑ、持出で、御前に進み、両手をうかべ、其のまゝ差上ぐるなり。客人は、右手を出し、左手をうかべ、帛紗のまゝ受取り、左手に据ゑ、右手をそへて呑むなり。呑終りたれば、先、右手にて茶椀の縁を持ち、菓子に並べて置き、四ッ折ににしたるふくさを、又、たて二ッ折にして、茶椀に並べ置くもくるしからず。かよひの者は、時分見斗ひ立出で、御前に進み、右手にふくさのはしを取り、左手にのせ、其のまゝ茶椀を持そへ引くなり。薄茶には、普通ふくさはなし。但し、女禮は、何も帛紗を式臺に据ゑるを式正とす。煎茶は、必ず臺に据ゑ蓋をして持出る法なり。呑みて、菓子の右脇に置くべし。通の者、臺ともに置きて立さらば、臺にのせ引かすべし。呑む時、口にて息をせぬ物なり。又呑みながら、外見をせぬものなり。

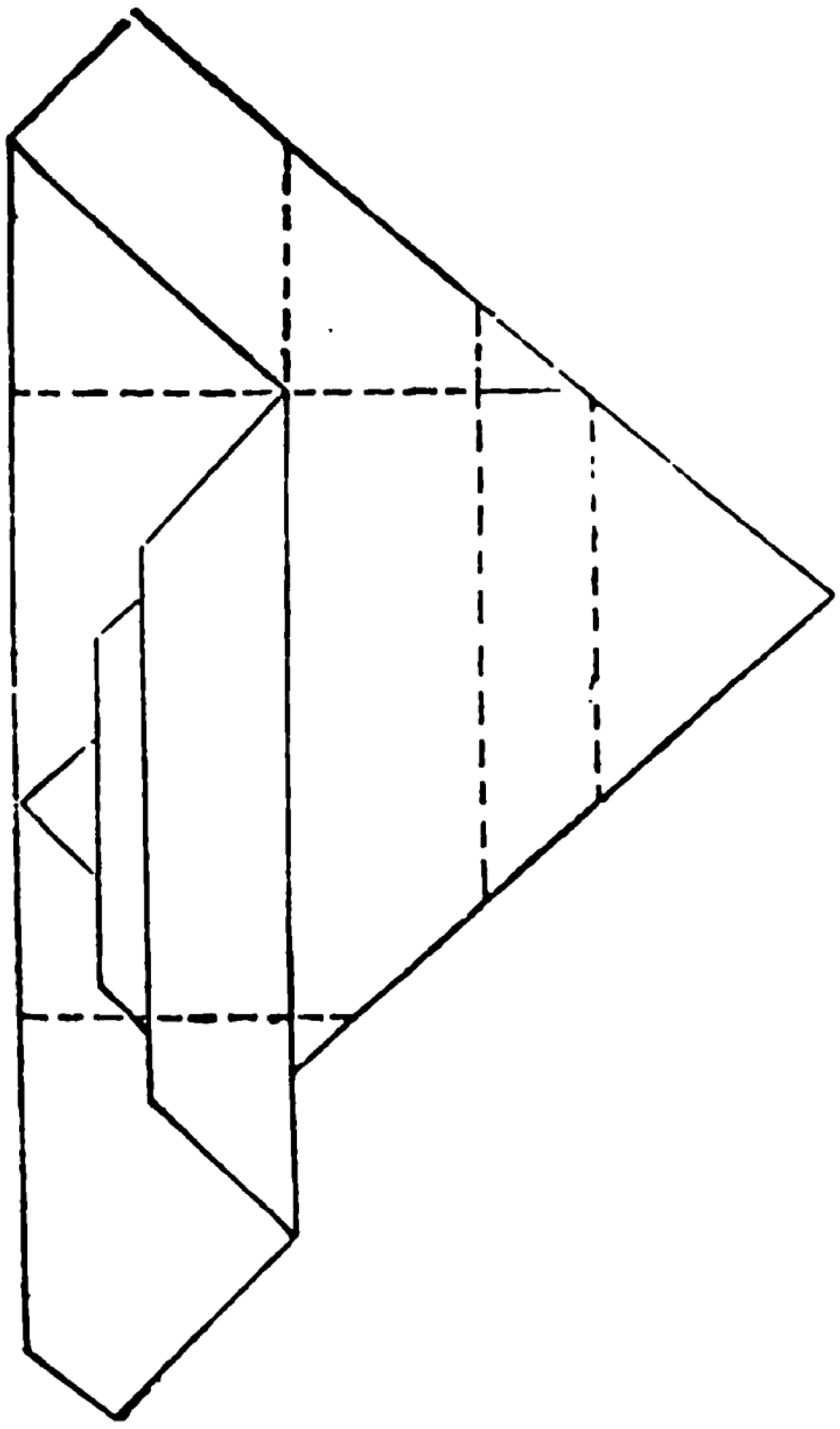
折方

有住くわう子

毛拔包

ここの毛拔包も、前に出したると、つかひかたは同樣なり。屋敷方により、包方かはることあるものなり。

これも、水引かくるなり。

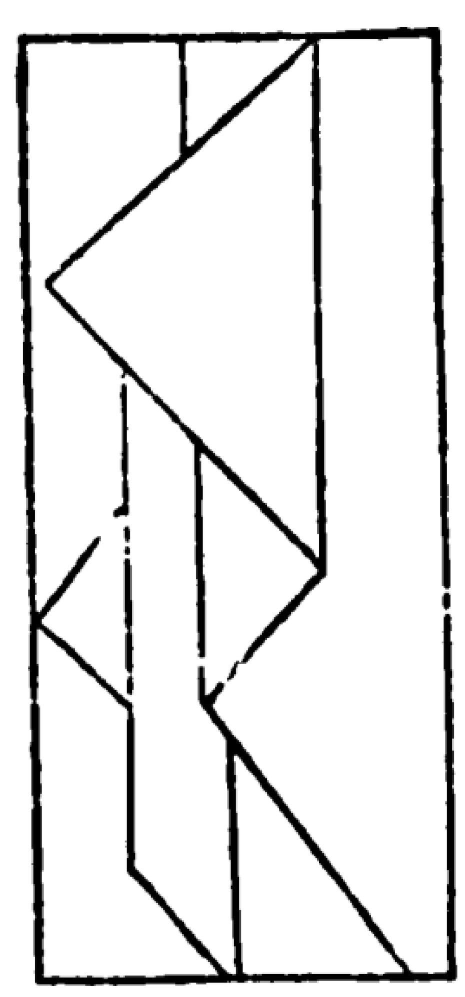


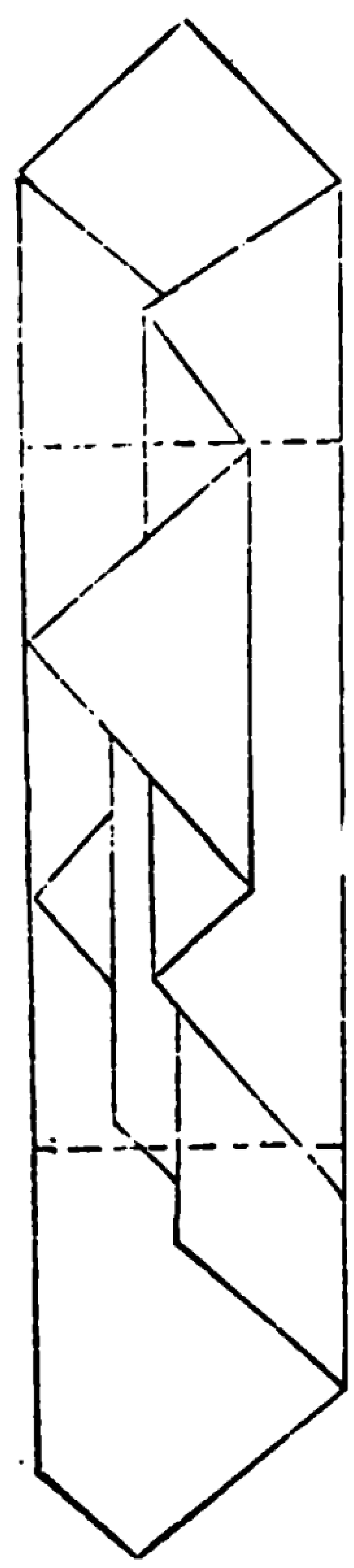
茶の湯

茶禮初學

孤峰菴磔仙齋不羨

關　葦雄





旅簞笥　利休居士好桐木地、中に二重棚あり、下の棚は、幅狹し。上棚には、左の方に、切

掛あり、是は柄杓を掛くる時の爲なり。此の棚は、居士特に得意に發明せられしものにて、豊太閤御出陣なされ御供仰付られし時は、此の中に茶具を納め、連雀を付、從者に脊負はせ往て、何時も、御茶食され候時は、點じ差上たりと云ふ。簡易にして、風雅備り、製作も、左迄面倒もなく、貴人の御持用なれば、上に差籠の金物ありて、是に錠前を掛け、封印をすれば、容易に、他人の手を附る事能はず。竪蓋の取置に、初心は困難もすべけれども、稽古の上には、最、妙なり。書取にて、詳細者示教しがたき手付指付もあれども、出來得る限りを、爰に示す、讀者諸媛孃之を諒せられよ。

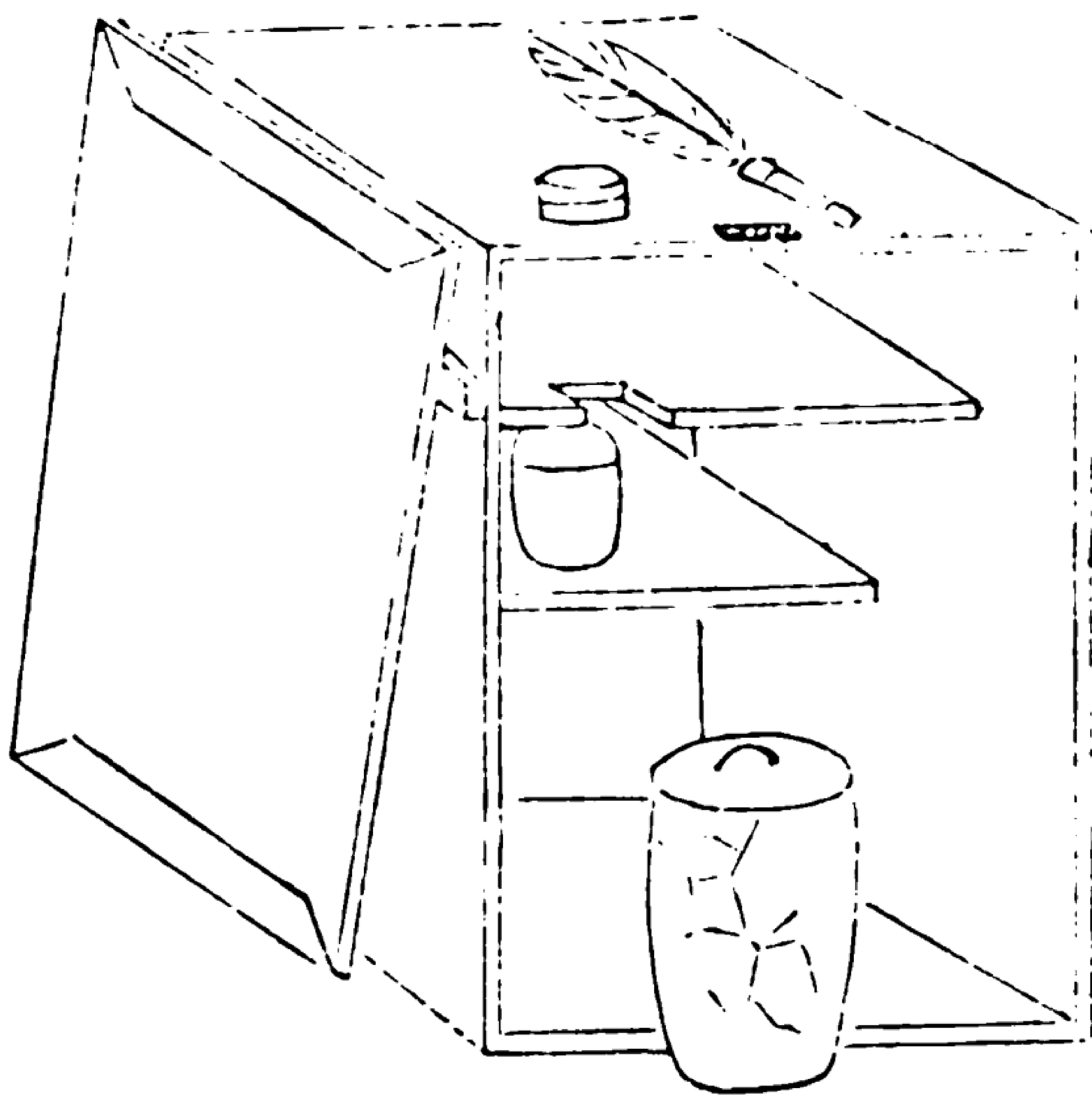
先、第一圖の飾りの時は、例の如く、茶碗を仕籠持出、風炉の時は、疊の眞中に座し、左手にて、茶碗假置して、右手を出し、金物を手に掛る、(但し拇指を下にして、上の金物に四本の指をかくる)是拇指にて、上より差籠、有之、金物を拔取、蓋の前、金物の鐶に差籠み、拇指を上にして、此の金物を持、蓋を前へ引出し、(但三寸斗)次に此の手持ながら名指ゆゑ、以下の四本を蓋の中の方へ廻し持ち次に左手を逆に、爪先を下にして、蓋の中程へ添へ、右手をきかせて、前の下の溝をはづし直に棚の前に置、左手にて、蓋の左の方、中程を篤と持ち、右手を離し、左手にて、蓋を疊の上をすらし、ながら、稍、直に成たる時、右手にて、左り手の上を持ち棚の左の方へ、蓋の外の方を棚付へ向けて、差込立掛べし。棚より五分出し置と心得べし。次に水指を出し、兩器を置合すべし。水指を半分出すは、此の棚と紹鷗棚の平水指斗なり。又、

是棚には、芝點と云ふ、點方有り、師傳を受べし。蓋の納め方は、取たるを反對と心得べし。

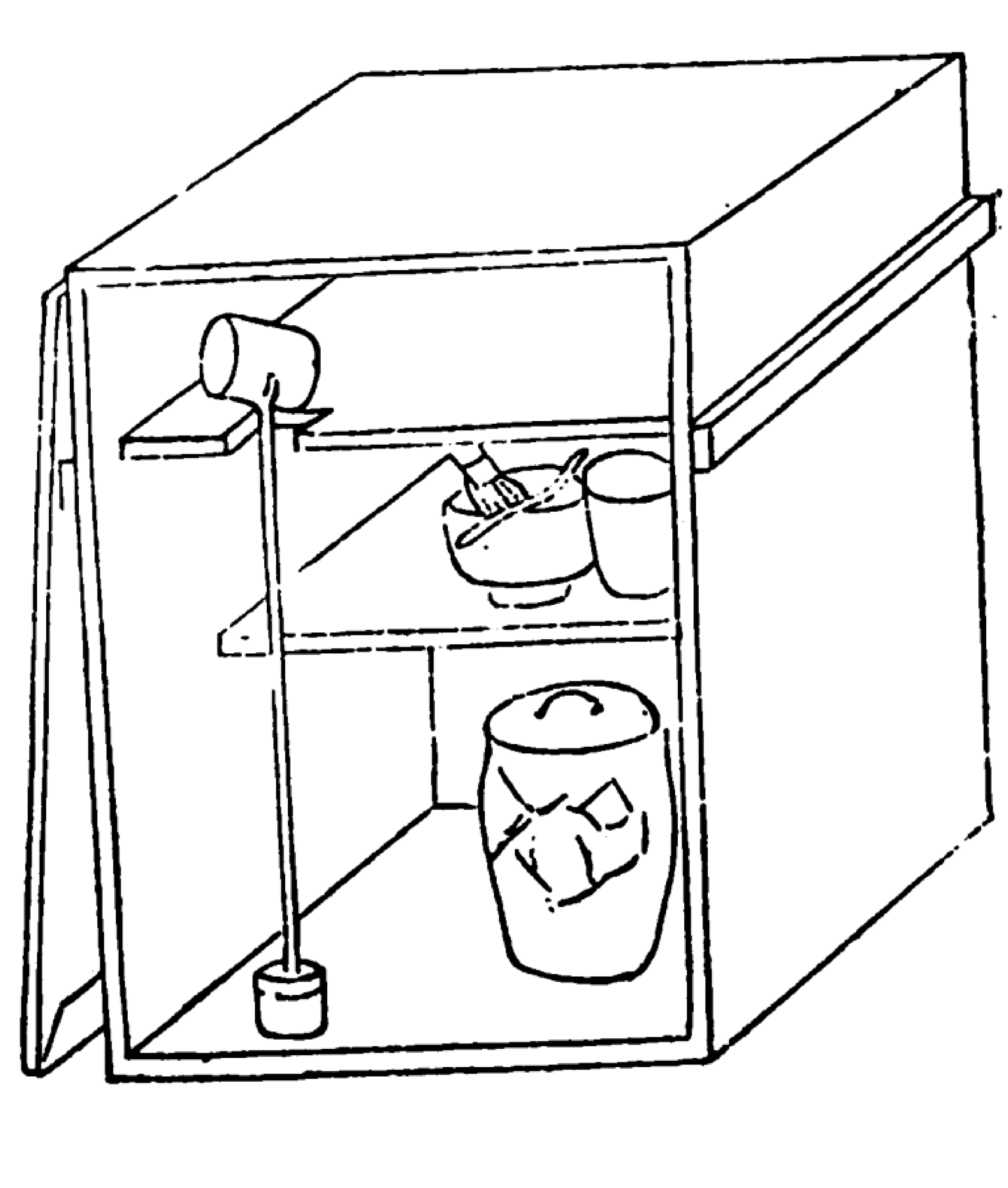
旅簞笥

初飾

天井羽箒香合
水指如斯半分出す
其儘置時は下の棚
板上へ置ろ歟前な
上げて向へ落す歟
開據の中總飾茶器
柄杓蓋置も同し



天井炭斗或は一輪入

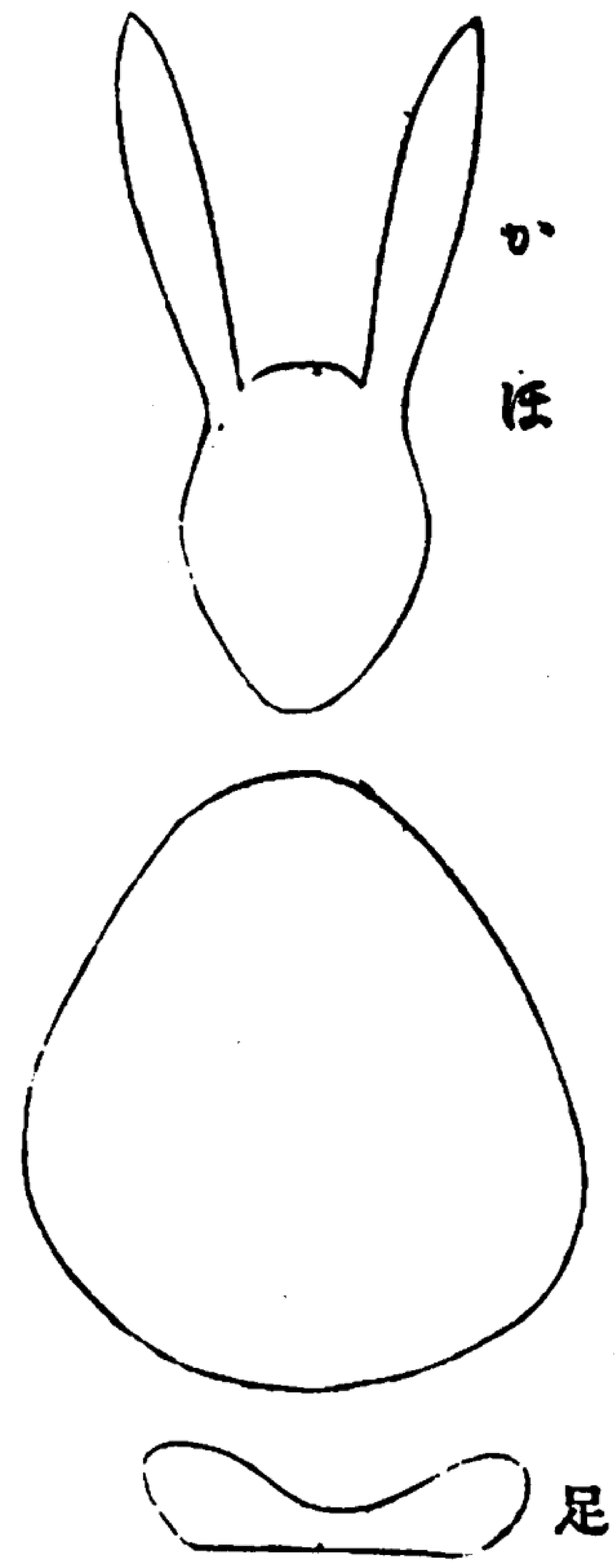




たちぬひ

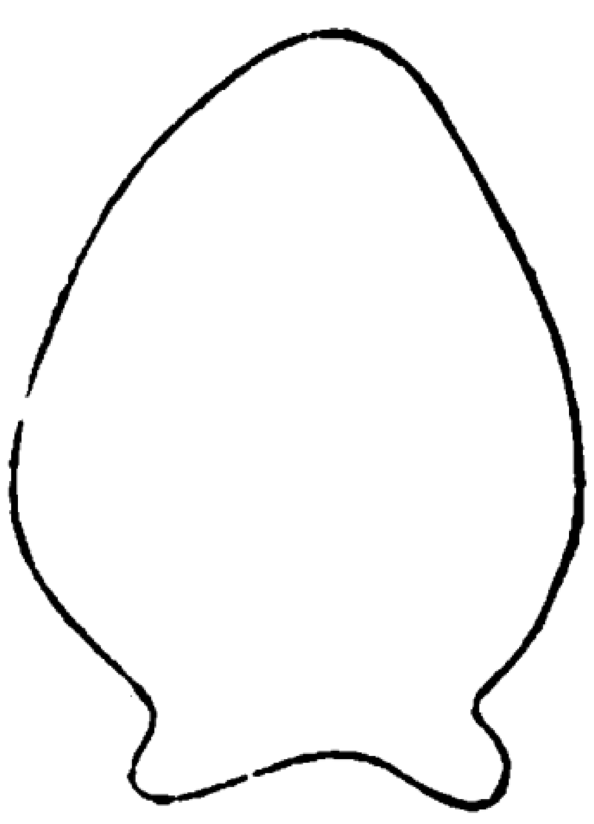
西山たい子

にはひふくろ 兎の形



右の圖の如き形に厚紙を切り、之に例の如く綿を入れ、切を被せ、胴の下に足をつけ、胴の上に顔をはりつくべし。而して、裏も、また、厚紙にて表の胴と足をつけたるものより、少し小さめに、

即ち、



（その圖）



此の如き形にきり、綿を入れ、切を被せ、紐をつけおきて、裏と表とをはりつくべし。之の符は、紅をうすくして、ぼかして、色づくるが、うつくしくなるべし。



だいどころ

割烹文學

土佐日記

石井泰次郎

土佐日記中に於ける飲食物に附て、其の如何を研究せんかは、左の諸種を、深く考究立證せねばならぬ。されば容易に是をなす能はざる事であるによつて、暫く他日に讓るとしておく。これは、皇國文學をしらぬからで、甚はづかしき事でござる。

第一　酒
第二　饗應の仕樣
第三　くちわみ
第四　よきもの

第五　飲食の仕樣
第六　屠蘇白散
第七　押鮎
第八　はがため
第九　なよしの頭
第十　はやのつまのいずし
第十一　すしあはび
第十二　まがり
第十三　破子、小櫃

これらのほか、まだ、心得ぬ事が條々にござるが、今は、この事を外にして、世の俗言に無學と呼ばれてゐる、料理職人、即ち貨食店の職人の樣な考へから立案した、此の日記の條々を、素讀した樣な、料理品をこゝに考證めかして、しるして見たのでござる。

題　土佐日記

向皿　かき鯛

これは承平四年十二月廿一日の條に
門出す、其の由いさゝかものにかきつく
といふ詞をとりて、又廿二日の條に
和泉の國まで平らかにと願ひたつ
といふ詞の平らかとて、鯛をつかひて、器物に
いさゝかかき鯛をつけたのでござる

汁　葱　すりごま

これは二十四日の條で
講師、うまのはなむけしにいでませりわ
りとあるかみしもわらはまでゑひしれてひ
ともしを。といふ詞をとつて、講師がへつら
へる方ならんかといふ古き考によりて、す
りごまをつけたのでござる。

椀　若菜　みなさしんじょ

これに承平五年正月七日の條で
若菜そけふをしらせたる
といふ詞をとつて、船のはてたる所の名が、大
港でござるによつて、しんじよを港形に、大き
く切て入たのである。

焼物　鱸につけ　月生姜

これは正月十一日の條で、室津の月の樣を見せ
たのでござる
たゞ月をみてをにしひんかしをはしりける
といふ詞によつて、魚の切方を片細にして、煮
たる汁の上に月の形の生姜をうかせたのでござ
る。鱸をことさらにつけたるは、
かゝるあひだにみな夜あけて手あらひ
といふ詞の尾にゆひつゞけた考でござる。

吸物　大根わぎり　うむき

これは二月五日の條、ゆくりなく風のふきいで

て、ほとほと船もあやうきにかぢとりのいふにまかせて、ぬさたてまつらる丶所の詞にまなこもこそふたつあれ。たゞひとつあるかゞみを、たいまつるとて、海にうちはめつれぞ、いとくちをし。といふ詞あるによつて、鏡ぐさといふ大根を輪切にして、一つ海にうちはめつるさまに入れたのでござる。

取肴　小櫻ゑび　梅形そら豆

これは二月九日の條で、なぎさの院の樣をいひたる詞をとつて
しりへなるをかには、松の木ともあり、まへの庭には梅の花さけり。
在原のなりひらの中將の世中に、たえてさくらのなかりせば春の心はのどけからましとよめる所なりけり。
とあるのを考へ合せたのでござる。

香物　獨活

これは同條
こよひうどのといふ所にとまる
とある詞をとつたのでござる。

菓子　糉餅

これは十六日の條で
京へのぼるついでにみれば、山ざきの小びつの繪もまかりの
とあるのをたゞちにとつたのでござる。

さてこの考へになれる料理は、土佐人なにがしがむすめの、京にきたりてものまなびせしが、かへるにのぞみて、ともだちが、うまのはなむけせん料に、まをけたりしなり。すむたちよりいで丶、ふねにのるべき所にありしほどに、國人のまをけたるなれば、とみのことで、よい考へではござらぬ。

季節料理

茄子の胡麻煮

先づ胡麻を寶録にて煎り、摺鉢にて摺りつぶし、能く摺れたる時、水分量を投れ、砂糖醤油にて、能程に鹽梅し、其の汁にて、茄子を煮るなり。淡泊にて、香ばしきものなり。又、茄子を、胡麻油にていため、煮るも、よろし。

茄子のウツ煮

此煮方は、茄子の、若きものを、半分に割り、中をくりぬき、其の中へ、牛肉、又は、魚肉を詰め、再び、元の如くに合せ、干瓢にて結び、味淋醤油にて鹽梅し、煮るなり、焼魚の付合せ杯にもよろし。

白瓜の煮方

中位の白瓜の両端をきり、捧にて、中の種を出し、鹽ゆでになしおき、別にパンに、牛乳をかけ、濕りて、べた〲になりたるものを鍋にいれ、沸騰たせ、其の中へ、鶏肉、とり又は、牛肉の、たゝきたるものを加へて、食鹽砂糖にて鹽梅し、其中へ、鶏卵をいれて、能く交ぜ合せ、(葱の煮汁を加へるもよし)別に、ゆで置たる白瓜の中につめこみ、バタを、引たる鍋に投れ、よくころむし、外がわを、あたゝめて、これを、輪ぎりになし、皿に盛り、上より、牛の煮汁をかけて出すべし。

同葛煮

白瓜の皮を去り、たてに、四ツに割り、しんを去り、五分程にきり、鹽ゆでになし、更に牛乳をいれ、其中へ、食鹽、胡椒、バタ等を、加へ、鹽梅し、沸騰たる時、葛粉を、水にてとかし、これをかけて用ゐるなり。

榮花園

伊雑宮の御田祭（つゞき）

井上頼文

一つ　ひのもと雲かきはれて
二つ　ふき吹く神風や
三つ　みふねに帆をまきあげて
四つ　よりくる寶のおふね
五つ　いはふや御神いさめ
六つ　むでうおふねに音樂の聲
七つ　なみ風みよおだやかに
八つ　やへ雲みなへぎはらい
九つ　こつかの惡魔をはらい
十で　とをとき神の御末の御みいづ高さわ此のうえもなしャチハ

また

一つ　ひのもと、神世のむかし
二つ　不思議に、稲穂がおちる
三つ　御池に、植ゑそめけるか
四つ　世の中、弘く傳へ
五つ　祝て、この御田祭
六つ　昔の、儀式をまもり
七つ　なりもの、小謡、さゝら
八つ　八千代の、後々までも
九つ　こよなき、御國の祭
十で　とをとき、御苗を植て、祝い祭りて、御神酒波みかわす。皆さま肴に、鯉をとつてあげましよ。

また

一つ　ひめもす　家業を勉め

二つ　ふゆうに　くらしをたてゝ
三つ　御國の　御寶ふやし
四つ　世の中　さかゆくやうと
五つ　稲穂を　御神田に植て
六つ　昔を　いとしのばれて
七つ　ならぶ姿や　早乙女の笠
八つ　八聲に　つゝみや、大鼓
九つ　この世のあるかぎり
九の　とをとみ、かしこみ植る、御神田の祝の、御神酒をくめる、御肴に、鳥をさいて、進せましよ。

また

一つ　開く梅花に　鶯の聲
二つ　古巣に　鳴き寄る燕
三つ　三ヶ月　鳴く郭公

四つ　宵鳴く　深山のふくろ
五つ　稲穂に　むらがる雀
六つ　むこを野末に　囀る雲雀
七つ　なきたつ　小鳥の千鳥
八つ　山路を遠く　歸る雁
九つ　小雨や　門田のくいな
十で　所々で　囀る鳥を　よりどり　見どり
に　さいてくりやうと　かまえた

また

一つ　ひよりに　空晴渡る
二つ　吹き來る磯に　追風や
三つ　御船に　帆をまきあげて
四つ　寄せくる　寶の蒸瀛
五つ　磯邊まぢかく　碇をおろし
六つ　無類華藥　音樂の音

七つ　なりたつ　つゞみのしらべ
八つ　八百萬神の　亂舞のさわぎ
九つ　この神たちの　御船遊山
十で　とをちに　御船があがり　所々　新に
神々祭る。
實に　ありがたき神國の　御世に　目出
度　御田祭　御神酒　皆さま祝に　鯉を
收りとつて　あげましよ

また

一に　入江の　よしわら雀
二に　虹立つ　小雨の水雞
三に　囀る　虚空の雲雀
四に　しら／＼　荒磯千鳥
五に　五反田　横ぎる燕
六に　六時に　明鳴く雉
七に　日暮に　小森の夜たか
八に　はるか遠目の　山時鳥
九に　くれ方　歸る雁
十で　樹木の　小枝にとまる
鳥を　肴に　さしたい物ぢや

また

千田の　御池へ　詣りて　見れば
あそこでも　ぞそ／＼
こゝでも　ぞそ／＼
てん　か　うさぎ　か
たゞしは　すつぽん　か
ひとつ　日かげに　すかして見れば
ふたつ　不思議
みィつ　見つけた
よをつ　よつぼせ　大きな物ぢや
むうつ　無理から　手ぞらまいにえよか
なゝつ　なんでも　加勢をたのむ

やアつ　やかまし　静(しづか)にしなよ
こゝのつ　こいつは　笠(かさ)ぶせが　よかろ
とつた〳〵
亀(かめ)をとつた
皆様(みなさま)　そなへて
頼(たの)みます
また
さい鳥(とり)さし
祝(いは)いて　神の　おみきを汲(く)む
姉(あね)さん　さかなに　鳥(とり)をさいて　しんじよ　もを
しあねさま
そのさす鳥(とり)は
きじや　がん　かも　くまたか　とんび
イヤァハそれは
棹(さを)では
さゝれまい

家　政

もッと
手(て)がるの
小鳥(ことり)はゐぬか
あるは〳〵
こゝの根笹(ねざさ)や
かしこのかやの
もとにかくれし
雉(きゞす)の子(こ)は
いかに
それは
棹(さを)より　手(て)どらまえが　よかろ
ならば　これから　手(て)どらまへにしよか
さては
そなたも
加勢(かせい)を頼(たの)む
をつと

がつてん
　のみこんだ
手では　ゆくまい
笠ぶせが　よかろ
をつと
　がつてん
　　笠ぶせにしよう
　さいた　鳥　さゝいなイヤーハ

類文いはく。この、とくわか、さいわか應答の文句、および振つけ等は、七八年以前に森楠松といふ老人の作れるものなり。楠松老人は、村芝居にいでゝ、忠臣藏など演しる事ありとぞ。時々來りて、御田の歌うたひてきかせたりき。



國文學講義

田島隨二

（九）朋友

おなじ心ならむ人と、しめやかに、物語して、をかしきことも、世のはかなきことも、うらなく言ひ慰まむこそうれしかるべきに、然る人あるまじければ。

この一篇は、兼好法師の徒然草に出でしなり。もとより、法師の書なれば、中には、其方ざまの説もまじりて、うべなひがたき節も見ゆれど、大方は情ふかく、よく世の弊をうがて

り。其の文に至りては、古來、人の模範と仰ぐところにして、竹取物語、清少納言の冊子、さては源氏物語について最高名なり。
○心合へる友と、物靜に話し合ひ、樂しきことも樂しからぬことも、即ち、何事につけても、かくすところなく話して慰むることが、出來るならば、其れこそ、此の上もなく嬉しからうけれど、其の樣に、心合へる友といふものはあるまいからして。(これは言うても詮方なからう)。
○しめやかに、今のシミジミトなどいふに同じ。
○をかし、心にしみて感ずるを、をかしといふ。或は、此の方のをはおとかくべく、可笑の方には、をとかくべしといふ說あり。○はかなきことはかなしとは、常なきこと、即ち、とりとめたることのなきことなり。
つゆたがはざらむと、對ひ居たらむは、ひとりあるこゝちやせむ。
○すこしにても、其の心にさからふまいと何事にも、その通りそのとほりと、唯前に坐つて居るばかりならば、一人居ると同じことにて、友の甲斐なかるべし。
たがひに、いはむほどの事をば、げにと聞くかひあるものから、いさゝか、違ふところもあらむ人こそ、我はさまは思ふなど、あらそひにくみ、さるから然ぞとも、うちかたらはゞ、つれ〴〵なぐさまめとおもへど、
○相互に言出すほどのとは、誠實に聞いてくれ同意してくれる人にて、去かしながら、少しは異儀などを言ひ出すくらゐの人ならば、徒然なども慰むだらうと思はるゝけれど。即ち、我は左樣に思ふものかなど、あらそひうらみ、或は、ソレだから左樣だなど語りあはゞ、さびしさも

慰まうとおもはるゝれぞ、○げにと聞くかひあるものから、いかにもと相互に聞き甲斐はある人ながらといふ意なり○さやは思ふ、然ば思はうか思はぬとなり。

（未完）

漢文學講義

佐々木天游

茗谿廿勝小記（承前）　鹽谷岩陰

四堧黄葉第八

燈火稍可レ親。黄葉之侯也。涼秋爽氣。令下レ人神清上。學生前程萬里。須下愛レ秋親二燈火一。惜レ陰精苦上。餘力操レ觚。必得下如二老杜上秋興。六一秋聲賦一者上。

燈火稍親むべし。黄葉の侯なり。涼秋の爽氣、人をして神清からしむ。學生前程萬里、須らく

秋を愛し、燈火を親み、陰を惜み精苦すべし。餘力觚を操る。必ず老杜か秋興六一か秋聲賦の如きものを得ん。

此篇は。矢張前號廿勝小記の續で、其の第八であります。堧は、前漢書の註に、堧外垣之内、内垣之外とありまして、閣の内の游地のことであります。さて茗谿の四方の墻垣内に植わりてあります樹木が、秋にありますと、霜氣を受けて、黄ばみます。それを四堧黄葉と申したのであります。さて夏時の殘暑も、漸くに退き、大分に凌ぎよく、涼しくなりまして、燈火と親み近づき、燈前に書籍を繙き讀むによき草木黄葉の時節ぢや、（茲所の也は決語そこで涼しき秋の爽に、清き氣が、人々をして精神爽快、すが／＼しさを覺えしめまして、誠に勉強するによき、時侯になりました。笈を負うて、此の校に來り學ぶの諸生の前途（程はみち

のりと云ふことにて、前程は前途と云ふに同じ）は、萬里と中々遙にして、德器を成就する迄は、まだ遼遠で。所謂任重うして道遠しであるから、なか／＼と過すべきものでない。そこで爽涼の秋を愛し惜みて、燈火を引寄せ親みて、書見をなし。一寸の光陰（陰は、ひかげなりをも）惜みて、無駄に費さず、精勵刻苦と、はげみ勉めて、切磋せねばならぬ。さうして勉め學びて、其の餘りの力あれば　觚を操り（陸機文賦曰、或操レ觚。註觚木之方者。古人用レ之以書。猶二今之簡一也とありまして、觚は角な木片のことなり。古時紙の無き時に、茲、木片に文などを書寫したものでありますから、文詩を作ることを、操觚と申します。）て文詩を賦せば、必ずきつと、老杜（唐人杜、甫のことなり。唐に杜甫と杜牧之との二人あり、共に有名の詩人なり。世人甫を老杜、或は大杜と呼び、牧之を小牧と呼びて、相分つ）が秋興の詩。（杜甫が、秋興八首を云ふ）六一居士が（宋人歐陽脩六一居士と號す）秋聲の賦の樣な、名篇佳作を作り出すことが、出來るであらうと。さて此の篇は、四壖黃葉と題しながら、其の黃葉の景色に付ては、別に記する所なく、返りて、其の燈火親むべきの候と云ふ所より、惜陰精苦の上に持込みて、一篇をなしましたもので、亦文の變化であります。

廟屋鸛巢

廟屋之背。有レ鸛結レ巢。乘二朗霽一鳴レ喙。高唳淸嚠。聲聞二百步外一。蓋大鳥非三去レ地數尋一不レ巢。洵乎非三燕雀所二能測一。

廟屋の背。鸛あり巢を結ぶ。朗霽に乘じて喙を鳴らす、高唳淸嚠。聲百步の外に聞ゆ。蓋し大鳥地を去る數尋に非れば巢はず。洵なるか燕雀の能測る所にあらず。

聖廟の背後の木に、鸛と云ふ鳥が、巣を懸けてをります。そこで廟屋鸛巣と申したのでありますさて聖廟の背に鸛（鸛は和名をほとりと申します一体は水鳥でありますが、巣は樹に懸けます。本草にも、鸛水鳥、似レ鵠而巣レ樹者也とあります。）と云ふ水鳥が、巣を結び懸けてをりますが、朗霽と、天氣がはがらかに、晴渡りました時に乘じりて口背（喙はくちばしのことなり）を鳴して、天朗かに、氣清き日になると、啼きますが、其の啼聲が、如何にも高く朗に、清く澄み渡りまして、（字書に喨朗也　瀏は清也とあり。又文選註瀏亮清明之稱とあり、喨は亮に同じく、瀏は瀏に同じく、そこで高喨清瀏四字で、朗に清み渡たる聲を、謂ふことゝ心得べし）能く百歩（一足二足と數へて、百歩みを云ふ）の外の遠き所まで聞えます。蓋（蓋は推原の辭なり）鸛と謂ふ鳥は、大鳥にして、尋常の小禽とは異なりまして、地上を去ること、數十尺（一尋は、八尺のことなり）の高き所々に非れば、巣を懸けませぬので、其の氣位の高きことは、洵に（洵平洵は信なり乎は歇語辭にて語の餘なり。少しく咏嘆の味を帶ぶ。洵乎二字でまことにと云ふ程の意なり）燕や雀などの様な、紛々たる小禽の、能く臆測して知り得る所でない。（史記の陳渉世家に燕雀安知二鴻鵠之志一哉とあります。）洵平以下は、此の語に本いたものであります）

後圃黄菜

黌隅隙地。菜圃可二十歩一。黄花淡香。自有二田舍風味一。蛺蝶翩々。暫去復來。亦復可レ愛。

黌隅の隙地菜圃十歩ばかり、黄花淡黄自ら田舍の風味あり。蛺蝶翩々として。暫く去り復來る。亦復愛すべし。

黌舎の隅の方の空地に。（隙地はあきちのことな

り）菜の畑が（圃は畑のことなり）十歩ばかり御坐ります。（可二十歩一は。十歩許と云ふに同じ）か黄色の菜の花が咲きて、わつさりとした香氣が致しまして、自らどことなく自然に。郊外などの田舍の風味趣きがありまして、繁華の地になんとなく郊坰の趣があります。菜の花を尋てまゐります所の胡蝶（蛺蝶二字で。矢張りてふ〳〵のことなり、さて餘事でありますが、昔時謝逸と云ふ人がありまして、此の蝶の詩を三百首程作りましたから、時人が謝胡蝶と呼びましたことがあります。此は更に關係なきことなれども、名高き話でありますから、叙に申して置きます）が翩々と、翻り飛びまして、暫時の間、去りてみえぬかと思うてをりますと、復た再び飛び來りまして、頗る情致あるもので、是もまた愛すべくして、しほらしきものである。

後衢市聲

本鄉街。市聲喧闐。頗援二唔咿一。然致二此繁華一。果誰之力。廻思至レ此。誰不レ起二感慨一。

本鄉街。市聲喧闐。頗る唔咿を援る、然も此の繁華を致す。果して誰の力ぞや。廻思して此に至れば、誰か感慨を起さゞらん。

茗谿の後門の外が。直に本鄉の通りであります。そこで後衢（衢は四達謂二之衢一。九交謂二之衢一なととありまして、四ッ辻、或は九ッ辻になりたる所を云ふ。されど穴堅に、四達九交とは限るべからず、街に同じく、町のこと丶心得ふべし）の市聲と申したのであります。さて後門の外の本鄉街（街は四通の道を云ふ。即ち町の四ッ辻になりたる所）の市の聲が喋びすしく、やかましく、（闐も矢張やかましきことなり。又字書に闐々車馬之聲也とあり。喧は嘩に同じ。そこで喧闐二字で、やかまし

く、さわがしきことなり）耳障りになりまして、よほど（頗は餘程と云ふこと）讀書の妨になります。（正字通伊吾は吟哦聲、亦作二咿唔一とあり。一休唔咿は讀誦の聲を申しましたもので、ありますけれども、茲所にては、單に讀誦することを指して云ふたものと心得べし。擾は亂なり。みだらすことなり）されども（然は轉語なり）個樣に繁華殷賑を致して、街が繁盛する所以のものは、果して誰何人の力であろうか。それは即全く明君賢主の力であらう。思ひ廻らして、此事に考へ及ばば、誰何人が感慨を起して、上に明君賢主があらせらるゝに依て、此の繁華を致して、泰平を樂むことが出來ると感じを起ぬものはあるまい。さうしてみれば、市聲の喧聞も、太平の一象として喜ぶべく、唔咿の聲を擾るとのみ、厭ふべきものでない。果誰之力の下並に不レ起二感慨一の下に、乎、或は哉の字を補ふの心持にて讀むべし。さうすると了解し易し）



童女教（其の六）

一　夫、もし無學ならば、より〳〵勸て、學文なさしむべし。學問は人の日用の道なれば、朝夕の衣食よりも必用なり。道は猶路の如しとて、人皆日中に士農工商、それ〳〵あつまりて、人事の所作に歩行する道のごとし。又道中海道のごとく、行ふ人は、旅人のごとし。たとへば、東國の人、西國のはてへ行に、山海の難所をしり、旅泊の様子をならひ知てゆくときは、道まよふ

ことなくして、數百里の遠にも行易く、學文も
また、同じ。此の道により、今日人倫日用の義
を行なり。かならず、無學の人のいはく、心正
しく、不義不禮ふかう不忠ならねど、學文せず
ともよしなどゝいふ。物の善惡をもわきまへず
して、何と心の正しきことをしらん。孝に似たる
不孝義に似たる不義も有れど、學文しての上に
あらざれど、是非は論じがたし。人は萬物の靈
といふて、天と地にならんで、三才の德あり、
煖に衣、あくまで食ひて、此の三才の數にあり
ながら、その道をしらず行はぬは、淺ましきこ
となり。少年は老易し。はやく道にこゝろざし
候やうにすゝめ給へ。

色慾にふけり、愛におぼれてこゝろざしをう
しなふことなかれ。いにしへより、代々天下を
失ひ、國を亂し家をほろぼすこと、男のちやう
あいにはこりて、女のおろか心ゆへ、代も國を
もみだするなり。たけくいかれる男も、女のこ
とばには、去たがふものぞ。項羽が山をぬくい
きほひも、虞氏といふ女の別れには、ともにな
みだをながせり。たとひ夫の思慮うすく、短氣
にして、みだれをなすとも、女、よくやはらげ
なば、家のみだれはなさじ。道の行ひかたきは
賢をもちゐられぬゆゑなり。かくのごとく、男
の心を自由になす女の身にては、無學の夫も、
はくがくになし、惡人をも善人になしがたから
じ。嗚呼、女の男のごとく學文なきこそわりな
けれ。されど、自然とかしこき女もありて、つ
まのすゝめによりて、惡人の男、善人になりし
ためし、唐土、日本、儒佛ともに、これあれば、
よくよく心得給ふべし。

一 學文はならずとも、かなさうしにも、聖賢の

ことをしるしたる人のかゞみとなる書あまたあり。たづね求ても見るべし。また朗詠集、つれづれ草などもてあそぶべし。四季の風景、ときの興たり。及ばずとも、和歌風雅の道に心をよせよ。花中の鶯舌は、花ならずして、香しといふことあり。伊勢源氏の二抄は、和歌の情たりといへども、あしく用ゐば、淫亂の媒ならん。此の外古き物がたりどもを見給へ。代の盛衰もしられ、人のこゝろの善惡を見ては、身のつゝしみにもなり、人に交て、はなしのしなともならん。

將來の日本國民（二）

肝付兼行

偖、先輩の言に、稼を植ゑるは、一年の計、樹を植ゑるは、十年の計、人を養ふは百年の計といふ言

がありますが、新興國の事業として、其の國民の長所、即ち特種の新神氣を發揮せしめて、其の「キヤラクター」即ち品性の矯正を計るといふことは、實に數十年乃至百年を期して計るべき教育事業であるのであります。殊に近古二百有餘年間鎖國といふ殘酷なる所の壓制を受けて、萎縮し固まつた、我が大和之助の蟄居的品性は、なか〳〵一朝一夕にして矯正のできるものでない。當世紀の始めに、那翁一世の蹂躙を受けた獨逸が、其の最終の戰後五十五年にして佛國を蹂躙し、其の宿恨をはらすに至つたのも、要するに、教育の方針を一變し、着々、其の新築を實行して、國民的獨逸魂の發揮に數十年の星霜を費した結果に外ならぬのである。乃ち、大和之助の品性の矯正は、教育に頼るより外に道はないのである、人間の本質は、人のよく改造し得るものではありませぬが、

習慣性となるといふことがありますから、習慣さへ改めてゆけば、品性は、決して、矯め直しのできぬものではないと思ひます。そこで猶こゝに話して置かねばならぬことがある。今、茲に十人の軍人志願者あつて、其の十人に陸海何れを撰むかを問はむとせむ乎。其の八人迄は恐らく陸軍を志願しませう。私は今年其の原因の最も主なるものを見出したのである。今年の五六月の頃の事でありますが、海軍主計官を學士の中より募らうとした事があります。此の主計官といふのは、准將校でありますが、現今大藏省の主計局長たる坂谷法學博士は、以前我が海軍主計學校に敎官を兼勤された縁故もあるので、此の心配をされたのであります。さうして漸くのことで、五名の志願者を得られた處、其の五名が、まもなく志願の取消を申込で來た。そこで如何なるわけかと取糺されてみると、揃ひも揃うて、皆、其の母の不承諾に基く取消なのです。私は、此の事を坂谷君から聞いたときには、實に、我が海國の爲めに天を仰いで嘆息したのです。これが、現今我が海國男兒の母たる敷島女子、而も學士の母たるもの丶腦髓であります。されば、敷島大和之助の品性の矯正には、先づ以て、其の母の腦髓より直して掛らねばならぬが。大日本帝國々民の家母を作るのも、亦、實に諸君等の大責任である。要するに、海國思想に富むだ敷島女子ができて、初めて、眞の大和之助が出來るのである。

扨國なるものも、天形によつて分つと、島國陸國、半陸半海國に分けられますが、一寸の海岸もない眞の陸國といふのも少いが、また、純然たる海國即ち島國も亦少い。眞の陸國とは、即ち、瑞西の如き國で、島國とは、即ち英國の如き國をいふの

でありますが、我が國も、亦純粹の海國で、英國と東西相對して、世界に比類稀なる島國であります。然るに、此の兩國民の風俗習慣を對照すると、實に雲泥も啻ならざる懸隔があるのであります。さきの學士の母の話しに對して誠に、よい壯快な話がありますから、即ち之を話して彼の習慣風俗の一斑を窺ふの資に供しませう。南緯約三十四度乃至四十八度の間に廣がり、我より、南少し東へ、約四千五百哩を距りて、一ッの島國があり。ニュージーランドといひます。此の島國は、南島中島北島に分れて、英國の殖民地であります。故に、其の風俗も、全然英國風で、海軍を重んじ、海軍士官を誠に貴びます。明治十八年の事ですが、我が練習艦筑波號が、遠洋航海をして、此の地に抵り、北島即ちオークランドのオークランドと云ふ港に寄港したことがあります。ときに此の地の住民は、我が海軍士官に非常に厚い待遇をしました。即ち該市會の議長議員等は、其の細君令孃と共に、百事を周旋し、我が士官の饗應に毎日、これ日も足らずといふ有樣でありましたが、之が上にも、議長グラハム氏は少し隔つた海岸に温泉の出る別莊を所有して居るに任せ、是非、其の地に船を回はして遊べとの勸めでありました。そこで、我が艦長は折角の厚意辭するに由なく、回艦せんことを約束しましたが、其の翌日不意に公命の電報に接して、急に、此の港を出帆する事になりました。そこで此の約束に反くの申譯と過日來の待遇に對する謝辭を述べ、且つ總員の代表者として、訣別の辭を告げしめむと、一士官をボートに乘せて出しましたが、此の漕手は、當日海が荒れてゐたが爲めに、皆人選で出したのであります。然るに、此の平穩ならぬ海上、我がボートと行違ひに、

何艇なるか。陸岸より本艦を目指して、一艇の帆を揚げ、白波を蹴て快走し來るものがある。そこで、我が艦員は、訝かしいことに思うて見て居ましたが、其の本艦に着して、舷梯を上り舷門に入り來たるを見れば、何ぞ圖らん。是前日の饗應に周旋せし妙齡の貴夫人令孃たちにして、惣員八名、一人の男を混ぜず、我が出艦の報を新聞紙に見て告別の意を表せむが爲めに來りしものならむとは。嗟此の女子ありて、アングロサキソン民族あることを知るべく、アングロサキソン民族が、世界に三億八千萬の人民を支配し、其の領土に日沒を見ざるもの、豈偶然ならむやとは、是當時艦長として、此の實況に遭遇した、有地中將の感に擊たれての物語でありました。我が學士の母と對照して諸君如何なる感じがうがひます乎。私は、實に長大息の外ありませむ。

そこで、いよ〳〵、大和之助の長所といふことを述べますが。偖長所は幾ら見出しても、見出したのみでは、國力を發達させることは出來ない。抑國力なるものは、如何なるものであるか。之を大別すれば、兵力と富力とに外ならぬものであります。元服のしたでの大和之助に對し、列强を以て壯年者だの老成者だのといふのも、何によるかといへば、つまりは兵力と富力との差別に起るのである。偖、我田引水的の偏說かは知れぬが、私の目に映ずる所では、十九世紀(來年一年で、はや、二十世紀になります)が、世界を變化せしめた中で、最も顯著な現象は、世界をして海上的の世界とならしめたことである。即ち、世界を見渡すに、海上權を得て居る國は皆振ひ、得て居らぬものは、孰も振はない。即ち、一國の振不振は、海上權の有不有に剖るゝ者である。現今世界で海上權を占て居

る第一の國は、申迄もなく英國でありますが、實に英國は、海軍に海運に世界海王の全權を掌握して居るのである。之に次で、海軍即ち兵力の働きの側からいふと、先づ佛國、露國、米國、伊國、獨逸と云ふ順で、其の次ぎ、即ち世界第七番目は、慶すべきことには、我が大日本帝國といふことができるのであります。扨、此の海上權なるものを得るの利は、どうしても純粋の海國、即ち四面環海の島國にあるのでありますから、英國が、此の權掌握の第一者たるは、道理のあることである。先年、我が宮内省より各府縣の師範學校中學校へ下賜されました。マハン氏の海上權力史論は、我が海軍水交社で、私の幹事をして居つた時に、反譯になり、東邦協會で出版になつたので、即ち私の其の校正に與つたものでありますから、此の本に對して、私は一般の讀者より馴染が深いのみならず、

又た此の書の爲めに啓蒙の利を得たのである。又、此の書の尊重されたのは、獨り我が國のみでありません。たしか明治二十六年三月のこと、記臆します。本書の著者が米國の「シカゴ」といふ巡洋艦で歐洲へまゐりました時に、英國は、大に彼を優待し、此の著述のためにオキスフヲルト、ケンブリッヂの兩大學は、大博士の稱號を贈與し、ロンドン市に於ては、大歡迎をしました。又、獨逸皇帝は、海軍士官たるものは、必ず、此の書を讀むべしとの勅諭を發せられ、同國の文部省は、之を國文に反譯して、全國の師範學校に分賦したとのことであります。當縣の師範學校及中學校には必ずありませうが、此の書の貴いことは、まづこれでお分りになりませう。そこで、此の書の說くところによれば、海上權力には、六要素がある。固より動かす可らざる分ちで、其の分ちには容喙は

できないが、之を解釋するには、能く咀嚼して、日本の地理歴史に當てはめ、又、他國の好適例を引き來たつて述べねばならむ。如何に名論でも米國の爲に心血を注いだものを、其の儘そつくり述べては、我が日本の爲めにはならむのである。今私は、此の六要素の區分及、其の精神を假り一種の解釋を我が國の爲めに試みやうと思ひます。

かたみぐさ

大分縣選出朝倉衆議院議員の嚴父が、子孫のために遺されたるものなり。

反二求諸己一

家の本在レ身反求の二字、聖經賢傳百千萬言の歸着する所なり。在レ身の二字も、亦同じ工夫にて、天下の事、大事小事、此の道をはれて成る事なし。大、四海を包み、剛、金石を貫く、豈複た他道あらんや。

明治三十一年一月朝倉君の需めに應じて、松陰二十一回猛士先生遺訓を、我寫し、かたみくさの題字に代ふ。

念佛庵主やじ拜

予不學不才にして、多年君に仕へ、させる功もなきに、恩澤を蒙り、年老るまで、身を全うなしけるは、是先祖父母の餘慶ならん。さすれば、いよいよ身を愼しみ、積善を忘れずして、子孫に、寸志を遺さんこそ、本意ならめ。仲冬の長き夜、燈下に眉をひそめ、そのあらましをかいつけて、かたみ草と名づけぬ。

草木心なしといへども、四季をり〱時をたかへず、花咲き實のるは性の善なるとはいはんのみ。まして人間、萬物の靈とあれは、身を愼しみ誠をつくすこそ肝要ならめ。

氣をつけて行はよこれす雪の道

天保庚子のとしゑるす

記念草

一徳不徳は人にありて、勤るにあらずと思ふは非なり。君子は、徳を愼むとあり。又獨を愼むとあれば、勤てならざるはなしとしるべし。

一賢愚は、性によるといへども、文を學べは、智をまし、武を勵めば勇を增す。寸陰も、惜むべき事なり。

一仁義忠孝は、人の常としれども、守りがたきものなり。仁は人の安宅、義は、人の正路とあれば、仁義を守れば、忠孝も全かるべし。

一我に才智ありと思ふは、智惠の足らざるなり。高慢自慢、利發めくも同じ。愚なるが如き顏回もあるとしるべし。

一人と爭論するは、同氣相對すればなり。相氣ぬいて、應答すれば、爭ひはあるまじきなり。

一勝れる人に習ひ、劣れるに敎へて、道を廣めるも、仁なり。惠をなすも、仁のはしとしるべし。

一理に勝て、業を負るあり。負て勝の理あり。勝に乘るは不覺なるべし。

一才は尖く、智は鈍し、才智、よく合體して、事を爲すに危き事なし。善備の人は稀なり。才は言葉かしこくて、仁愛の情薄く、始はよく、末は屆きがたし。智はそのうらとしるべし。

一人に得失あり。侮るべからず。其の長を取りて、その短を捨べきの意、勘辨すべし。

一疳積は、氣隨より起るものなれど、堪忍を、よく〳〵修行して、除くべき事なり。

一藝能ある人は、その業を誇り慢氣を生じ、禮讓薄きものなり。用意すべし。

一人は、好嫌あるは、私なり。廣愛の心忘るべからず。小事は、人に賴み、大事を計るべし。

一家とゝのはざるは、身の治らざるとしるべし。

一身ををさむるには、第一飲酒を愼むべき事なり。

一先入主となるとて、先に聞しに、贔負の付くものなり。心得べし。

一人の過ちは、咎むべからず。好みてするものにあらず。

一富貴は、羨むべきにあらず。月滿れば虧け人盛なれど、衰ふるの理あり。足らざるをたると思ふべし。

一士として、金銀を貯へ、利倍などするは、賤しく見ゆるなり。武器を備へありて、清貧なること、士の常ともいふべきか。

一貧乏は、心の僻むものなり。貧しく怨なきは難く、富みて驕なきは易しともいへり。心得べし。

一人と道を伴ふに、近を好むあり。又本道を好むあり。道のよきは遠く、惡しきは、近し。兩得あれど、人に任せて、我意あるべからず。萬事、此の理を考ふべし。

一遊藝といふとも、捨つる事なかれ。治世の道具なり。又陣中にて、勢氣を養ふの一助となりしもあり。

一腹を立るは、身の損なり。堪忍すべし。怒者は、常情、笑者は、測るべからずとあれば、小量を顯はすとしるべし。

一人より物を問事あらば、速に敎ふべし。知りてをしへざるは罪なり。

一用あるを訪ふに、急に逢ざる人あり。待は退屈なるものなれば、その心を汲みて、人來る時、吐哺の意用ふべし。

一負惜みは、心のくもり。早々改めて、めのくもりを晴すべし。

一人善事あらば、共に歡ぶべし。惡事あらば、ともに患ふべし。四海、皆兄弟なれば、不慮の災

難あるをも、縁なきも、力を添ふべき事なり。

一身の分限を辨まへずして、衣食住を飾るは徳を破り、困窮の基としるべし。

一儉約と吝嗇の堺をよく勘辨すべし。儉約は身の爲、吝嗇は、身を損ふものなり。

一諂ふ人に、油斷すべからず。陰言を告るは、奸曲なりとしるべし。

一疑ひは、邪氣より發る。悋氣は、婦人の情としるべし。

一賄賂權門を信ずる人は、上に弱く、下に强らして、その氣に乘を示すに似たり。恥べき事なり。

一依怙贔負も、追從從路より起るとしるべし。

右にしるせし三十ヶ條は、余が常に思ふ所なれども、十ヶ一ッも行ひ得ずして、かくいふは、をこがましけれど、子をおもひ家を思はざるはなきものゆゑ。いさゝか心にとむる孝子もあらんかと老の愚痴をもかへり見ず。殘しおくものなり。

思ひ出せし歌に

氣はながく勤めは堅く色うすく
食細うしてこゝろ廣かれ

人多き人のなかにも人ぞなき
人となれ人ひと、なせ人

愼しみを人の心の根とすれば
言葉の花もまことにぞさく

慾深き人のこゝろとなる雪は
積るにつけて道を忘るゝ

誰も見よ滿ればやがてかく月の
いざよひの空や人の世の中

鏡山人のしがから先見えて
我が身の上はかへりみず海

心だに誠の道にかなひなば
祈らずとても神やまもらん

我よきに人の惡きは在ばこそ
　人のあしきは我惡しきなり

人のうへ矢よりも早く見ゆれども
　わが身の上はいざしらま弓

上みれば及ばぬ事の多かりき
　笠着て暮せおのが心に

世を安う暮さうならば正直に
　堪忍質素家業精だせ

酒呑まば理屈くり言自慢やめ
　只面白う遊ぶ氣になれ

世の中を腹一ぱいに呑こんで
　胸につかへぬやうに暮せよ

何事も法をこえゆく世の人の
　心にかたき關守もがな

うへのうへかぎりもあらじ我よりも
　下のしもなる人を見るべく

植えて見よ花のそだゝぬ里もなし
　心からこそ身はいやしけれ

主從心得草（承前）

諏訪忠元寄贈

和論語、七に孝子のいはく、貴きことなく、賤きとなく、女の何事にも差いらへ心得たるさましたるは、必ず二心ある者としるべし。恥か敷事なり。なべて、昔より、女ははかなき者にて、男の、いろ〳〵といひしろふには、百人は百人ながらくだくる心出來て、永き浮名を流す者なり。此の趣むきに、心をつけて、骨を粉にくだき肉むらは、泥になる共、名を思はん。女は道を守るべき事なり。人は我が好むかたにあやまりなりて、好まざる方にはあやまりなき者なりといへり。人皇百三代　後花園院の母公の仰せなり。本文にて、大

體しれたり。此の心は、女は、貴賤となく、何事にも、差出で、心得たる風をするは、必二心ある者なり。油斷すべからず、又、昔しより女は、はかなき者にて、男より色々と、くどきなけゝば百人は百人ながら、それに隨ふ心出來る者なり。其の時は、世上に、浮名を流して、大にあやまる事あり。若左樣なる心起りたる時は、必ず愼て、たとへ、骨をくだき、身を粉にする共、かたく貞を守て、隨ふべからずと、末世の女人へ、異見の御詞なり。女たる者は、此の道理ある事をしつて深く愼むべし。

學のみち〱（承前）

故　網代弘訓　述

○荻生氏の譯文筌蹄出來て、漢字に俗言を施してより、詩文のつくりやうあやまりなく、くはしくなりたりといへり。皇朝の歌文等も、北邊氏のあゆひ抄、かざし抄、本居翁の古今遠鏡出來て、雅言に俗言をあつる事始まりて、昔にもおとらぬやうになりたり。雅言に俗言をあつる事は、まことに能教るなり。

○萬葉集を學ぶには、仙覺抄、代匠記、萬葉考、萬葉畧解等みるべし。古事記傳にも、萬葉の註解多し。あはせみるべし。作者の傳は、作者履歷考あり。文のかきやうは、萬葉用字格あり。枕詞は冠辭考あり。

○古今集は、ふるき註には、類註密勘あり。近きものには、古今餘材抄、古今集打聞、古今集遠鏡あり。あはせみるべし。

○伊勢物語は、勢語憶斷、伊勢物語、古意をあはせみるべし。

○源氏もの語は、ふるきものにて、河海抄、花鳥餘情近き物にては、湖月抄、源註拾遺、玉の小櫛紫家七論等あり。あはせみるべし。

○歌學をするに、かならずみるべき書類、眼法橋・の袖中抄新古今、みの丶家づと、草庵集、玉帚百人一首、改觀抄うひまなひ、等なり。

○近來の大家にても、歌の風は、皆利々なり。契沖長流は、誹諧躰に長し、鈴屋は、新古今の風を好まれ、千蔭、春海は、三代集より、花山一條の頃までの風を執したり。縣居翁は、近來獨歩の名人なり。たけ高く姿うるはしく、意よくきこえ、そのうへ三百年來ふるくしみつきたるあしきくせを一洗せられたり。

○文を學ぶには、古文は、延喜式續日本紀の詔詞を手本とすべし。中古の風は、伊勢物語、大和物語、源氏枕草紙等によりて、かき習ふべし。みかがみつれ／＼草古今著聞集宇明拾遺等の躰之文をもかくべし。扶桑拾葉集文栞、皆古文をあつめたるものなり。消息文例、紫文製錦、紫文消息の類、皆座右におきて常にみるべし。

此の書は、阿波徳島に逗留せし時、彼の國之長臣加島氏の需によりて、かきたるなり。旅者にて、事しげき間のしわざ故、疎漏がちなり。他日訂正を加ふべし。

弘訓（完）

一種物合（六）

松竹莊主人寄贈

九月廿三日於和學所執行

物判者　小中村清矩

歌判者　横山由清

左　物語さも勝

柳臺に、苔色のきぬを敷て、ひさげ土器をおき、紅葉の折枝そへたるは、何かしの御門に、いとよき紅葉を、人の奉りけるを、いたくめでさせ給ひて、朝夕ながめさせ、おはしましけるに、御垣守衛士は、心なく折て、焼きにけり。定めて、御怒つよく、おはしまさむ、とおそる〳〵此のよし、奏しけるに、彼の林間煖レ酒焼ニ紅葉一、といへるからうたを、のたまはせて、御氣しきことにうるはしかりければ、人々ことなう、よろこびぬとぞ。その昔の、めでたき御代のことにならひ、今のかしこき大御代を、いさゝかことほぎ奉る心にて、かくはものしつ。歌は、こがねの泥して、わはらけに、

色もまたやしほをりなるもみぢ葉に、
さけわたゝめて酌むがたのしさ。

右

源氏物語、紅葉の賀のをりの、がくのこゑつゞみの音も、松風にひゞきて、もみぢのにしき、いとめでたかりけむ、さまをおもひて、青海波の舞の袖を、地敷にして、砂糖もて、老かけしたる冠を、てうしておき、紅葉一と葉ちらして、そのもみぢを、うたゑのさまに、とりなして、金の泥にて、

散りかゝる紅葉の夕日いりあやの、
そでひるかへしにほふ秋かぜ。

物判云、はてのつがひとて、共に凡ならず、ものせられたり。左はいにしへの、かしこきみかどの、からうたのさまを、おもはしめて、人の罪を、とがめ給はざりし、めでたきふる事によりて、物さられたる、ひさげ土器は、たゞに一種物となれり。そへたる、紅葉の折枝、このころの野山の錦も、おもひやられて、をかしきに、

苔いろのきぬ敷たるも、詩句によしあり。けふの後宴のこの、かはらけとらむには、彼の白氏が、高きしらべをや、うち出なまし、右も、みかどの御賀に、紅葉のかげより、かゞやき出たる、君のひかりをうつされて、かざしに菊を加へたるも、物語の本文にかなひ、青海波の衣の袖に紅葉をにほはせて、うた繪にさへ取なされたる、心たくみ凡ならぬ物から、散りたる一葉のみにては、さう〳〵しきこゝちせられ、かつ落葉なるは、くちをし。勝は左の實事なるに、ゆづり給へかし。そも〳〵、一種物のみやびは、事ふりにたるを、かく題によそへ、歌さへよみて、まさり劣りをさためあらそふ事は、いにしへ今に、めつらしきわざとて、人々の番ごとに、心用ゐたゞならず、才のほども、いみじきを、おのれなどが、みだりに、言くはへむは、なか〳〵に事さましなる、わざなめれど、たはふれにても、よしあしのさためなからむは、興あさかるべし。としひてそゝのかし給ふまゝに、いさゝかいひこゝろみつることなれば、たゞひと時のすさびと、こゝろとゞめ給ふまじくこそ。

歌判云、左は、高倉のみかどの、かしこき御ためしを、今のめでたき大御代に、よそへて、ことほぎいはれたる、右は、朱雀院の、御紅葉の賀の舞の袖ふりにし、物語を、新しうとりなされたる、とり〳〵に、心きゝて、よきはてのつがひなるべし。たゞし、右の二の句、夕日入かたに、入あやの袖を、かへすといふ意なるべけれど、さはきこえがたく、夕日の袖を、ひるがへして匂ふ。とやうにおぼゆるは、愚なる判者のひがみにやあらむ。左の八しほをり、たれ

もたれもまちかはに、入綾の袖をば見ずして、紅葉の陰の一つきを、こそとおもふべけれど、かちたるべし。

そも〳〵この一種物は、各一種を隨身して、便宜の所に集會し、盃酌の興の催されし、わざなるが、寛治の頃はひより、こなたしばらく中絕したりしを、保延の四年ばかりに、絕たるをつぎて、殿上にてこの事行はれし、その後は、いかゞありけむ。近き世には、絕てその事きこえぬを、このたび、そのすたれたるを興して、このついでに、詠歌作文もそのわざなることなればとて、歌合にさへとりなされたる、いとめづらしき、いどみわざにて、今より後のためしにさへ、なりぬべくなむ。さて、その歌のよしやあしや、ことわりいへ、といはるゝまゝに、この席にはつらなりたれど、何事をか申いでつらむ。ども〳〵の、心しらひおきてども、めもあやなるに、さだめて、おもひいたらぬくまぐま、多かりなむかし。

（完）

消息文十二種

隨庵生

屋代輪池は、國學者なり。名は弘賢、太郎と稱す初名は、詮虎、詮賢後弘賢と改め、七十以後詮文と改む。輪池は、其の號、江戸の人、父は、五太夫佳房と云ふ。世々、幕府に仕ふ、輪池、和學を嗜む。本と塙撿校の記室たり。博識多聞撿校に類す。後ち、遂に一家を立つ、文化中、局を開きて、古今要覽千卷を著はし、傭吏書寫日夜筆を閣かず、平生自ら奉ずる儉潔にして、餘あれば、則ち書を購ふ。晩年に、書庫三字を築づく、有つ所の典籍萬卷に踰ゆ。考據を質くる者、最さも多し。又筆札を善くす、專ら皇朝の上代を修し。又、自ら一家の風を成せり。故に幕府祐筆に擧られ、祿を加へて、百俵を賜ふ。其の門に入りて、敎を受け、法を傳ふるもの、殆

ご三千人に至る。天保十二年五月十八日歿す年八十四、著す所、古今要覧六百巻、其の他あり。

(三) 妻に與ふる文　屋代輪池

妻をむかへ候ことは、なにぞといへば、先祖を大切に思ひ、父母に孝行すべきがため、次には、子孫相續のためなり。我等事、母樣御一人御座なされ候ゆゑ、朝暮、大切に、柔和に、御介抱申しくれられ候こと專一に候。すべて、男は、外のつとめを大切にし、女は、家内のこと、萬事油斷なく、取りあつかひ候事、第一に候。さて、孝行と申すは、有福にて、物品不足なきをいふのみにあらず。貧窮にて不足がちなる中にも、何がな、御心をなぐさめ候樣に、明暮こゝろがけ、かりそめの事にも、思召にそむき申さぬやうにいたし度きことにて候。かやうに口にはいひても、身には、夫程は及び申さず候。我等心づき申さず候こと、幾たびも心をそへ、異見をもしくれ候へかし。

女は、すべて、他人の家に行くものなれば、しうとは、實の親もおなじきことなれども、とかく、世間には、妻をむかへたる上にて、其の妻の心にひいきいたし、おやにまでそむき候たぐひもこれあり候へは、心ならぬことゆゑ、我等ことは、そなたの心づきにて、一段と御きげんにそむかぬやうに、たのみいり候。

又、ひとたび緣をむすび候ひては、一生ことゆゑなく、そひとげ申すべきこと、本望にて候。

聖人の教に、妻の身持あしきは、去るべきよし、仰せおかれ候七つの品なり。

一、父母に不孝なればさる。

一、子なければさる。

一、淫らんなればさる。

一、しつとの心あればさる。

一、あしき病あればさる。
一、言葉おほければさる。
一、ぬすみすればさる。
かく定めおかれ候へども、子なきとあしき病の二箇條は、子細あることなり。
すべて、我等心底に應ぜざる身持をいたされ候はば、それまでは縁といたし申すべきあひだ、隨分と精出し、萬端世話いたしくれられ候やうに、たのみいり候。
これらの趣は、まをすまでもなく候へども、たがひに、隔心ありては、不和の基ゆゑ、思ふまゝのことを、かねて申しいれ候なり。



曲亭馬琴が眼中に映ずる女性を論ず(其の八)

白松園主人

阿公は既に、鶴龜の兄弟を謀りて遠ざけたり。彼が奸惡を行はん時機は到來せり。彼は遂に病婦に迫りて、腹を剖いて胎内の兒を與へん事を求めぬ。嗚呼、今日開明の時代には、かゝる無慘なる野蠻的行爲はなかるべしと、誰も〳〵思ふらめど、神水と稱して腐敗せる水を飲ましめ、祈禱と稱して病弱の身を捷ちなどする者の、未だ絶えぬは何ぞ此の阿公の所行に異ならむ。鬼を欺むく阿公が、憐むべき新垣の腹をさく、慘酷なる光景を描ける馬琴が手腕の躍如として紙上に活動するを見よ。

阿公は龜が後影を、木がくろゝまで目送り果て、さて新垣に

對ひていふやう、いさ苦しげには見え給へど、婆々がいふ事をよく聞き給へ、かく産の氣はつきながら、目今生るべうもあらず、翌の朝の潮ならではと思ふに、今にもあれ兄弟の少年が立ちかへらば、便なきことの待るなり、さばかりにては心得がたからむ、腹なる子の欲しければ、絆のやうを竊聞て、かく信やかに欵待のみ、腹に子なくば見かへりもせじ。いさ理なき事なれど三十を越えたる難産は、大かたは生きがたし。ながく苦痛をせんよりは、なき身と思ひ諦めて、腹を裂かして兒をたべ、しかぜよさてが懐に小劍のある事ば、はじめより探りあてゝ、よく知りて待るなり、それ貸し給へといひかけて、襟の間に手をさし入れ、引きだす劍の袋の紐にすがりて、新垣は苦しげなる息の下に阿公をうち瞻り、理由はしらねども、腹なる兒も何かはせむ、母が命も惜しからねど、子を産みかねて死ぬる者は、怪しき鳥に生をかへ、雨の夜毎に迷ひ出づると、聞くだにも罪障ふかき、後の世はさまれかくまれ、今見るところは子どもらが父を喪ひ、又母が人の爲に殺されしとも知らずして、買ひもて來る催生湯の名にも似ず、末期の水さもならざりせば、さぞな本意なく思ふらむ、惜しからぬ命を惜しむ、それもはかなき子ゆゑの暗、くらきより暗きに迷ふな、憐れとは見給はずや、産みおとして後にこそ、この兒を進らすべけれ、聞きわき給へとかき口説けば。

虎よりも、大蛇よりも、殘忍なる此の賊婆、いかでか憐とは見む。却りて怒り罵るその言、讀者をしてすぐろに拳を握らしむ。

阿公は耳をさしよせ、何いはるゝやら蚊のなくばかりなる聲しては、老いたる耳へよくも聞えず、あゝおん身は果報めでたき人なりかし、土偶に對ひても、いひ知らする事にはあられど、さてもかくても今殺す、その耳へ聞かするは、冥土の餞別惜しうもあらず、こよなき婆々が情にこそ、いかなる人の娶かは知られど、腹なる兒はおほけなくも、琉球國王の世子と仰がれ、貴きこと萬民の父母として、富三省を有に至らむ、かゝる洪福は夢にだも見がたし、さればこそ鬼々しく、腹を裂かせよといひもすれ、ふかき情由ある事なれど、そは詳に告るに及ばず、おん身が腹をかいさぐりて、左孕は男兒としりて、所望の子だからは、死がひのある、親も面目痛うは殺さぬ、しば

しか穉ぞ辛抱せよ、ともの〱しくいはるゝもなほ不審、原來いぬる月陰陽師が、腹なる兒は短命なれど、國王となる供福ありと、説きしらしゝは實言なるか、まことにもあれわが子をもて、世子と仰がせては、罪なくて討たれ給ふ、夫は終に叛逆の惡名を世に流さる、正なごとに與せんや、身は醢にせらるとも、腹なる兒をとられじと、思へど彼を禦ぐべき力もたねてなが月の、五日の月の影おちて、草葉にすだく虫の聲、ちゝとはなかで母親は、ふたりの子ども歸るかと、戰栗ながら伸びあがれば、阿公は聲ざまかへて、あらもどかしやと罵りもあへず、項にかけたる嚢の紐を、さと引きちぎつて臂短かにあやどり結ぶ玉襷、新垣が胸前摑んで仰ざまに突き倒し、玉散る刃を閃かして腋淺くかき破れば、あつと魂消る傷口へ手をさし入れて引き出すは、思ふに違はず男兒なり、……

賊婆は、遂に忠臣の妻を殺せり。而して二人の孝子之れを知らず。天に私ある者の如し。思ふに正義の光は、何れの世なるを問はず、滔々たる逆流に立つ者なり。逆流に立つ者、いかでか艱難を嘗めざらむ。鶴龜は方に此の境遇にある者なり。

……かくもしらで鶴龜は、四五町には過ぎざらめと、思ふには似ず富藏河へはいと遙にて、彼處には藥店はさらなり、河を渉らざれば人家もあらず、こは欺むかれけんとこゝろに疑ひ、兄弟途よりひとつになり乾稻守翁に火を乞得て、炬火に路をてらし、いたづらに歸り來れば、胸さへいたくうち騷ぐに、心ます〱安からで、急ぐとすれどねも熟れぬ、夜行は、殊に東西をわかず、株に跌き荊棘に足を傷られ、辛うじて歸り著きにければ、赤子の泣く聲かすかに聞ゆ。さては恙なく生れたりけむ、母公はいかに在すらむ、いと〱心もとなしとて、兄弟喘々務の所へ走り歸り、まづ火を抗げて轎の内を見るに、母は其所にはをらずして、右手なる叢の中に仆れ、腸長く出でゝ鮮血に塗れたり、兄弟は此の景迹に、且驚き且悲み、こはいかにと泣き叫び、やがて左右より抱き起すに、腹を切裂れて死にたれば、絶ねて救ふべうもあらず、人間一生の哀傷は親を喪ひ子におくるゝにますことなし。まいて非命に死にたる母が、ありしに變る面影なれど、猶物いふかとゆり動かし、悲歎やるかたなかりけり。鶴はさすがに年勝れば、泚るが如き涙

を拭ひ、わが弟は何さか思ふ、彼の鬼婆々がまめやかにいひよりて、吾儕を遠けしは、心に物あればなり、さも曉らずして欺かれ、藥買ひにゆきたるを、今さら悔いて及ばれど、胎内の子の見ねざるは、難病の藥種にせんさて、殺してその子をさりたりけむ、思ひやるだにくちをしさて、蹉跎して泣きにければ、龜、は息杖かいさりて、仇人は認りつ遠くはゆかじ、這奴うちさめんさ勢ひ猛けく立ちあがる、裳を引きさゞめ、やよ待ち給へ、汝が志はさる事なれど、野干玉のくらき夜に、仇人の往方を見さめずして、追ふさもいかで及ぶべき、這奴が面はわれも認れり、しばしが程は脱ろさも、天のあみはねも漏じ、愆に追はんさして、却りて仇に謀られなば、志もいだづらならむ生けろ日の羞よりも、見ぐろしき死ざまをせば、いさ耻づかしき事なめり、父は生平に宣ひき。淺ましき母の亡骸を、人に見せんは不孝なり、さく〳〵をさめまゐらせん、さいひ諭しつゝもろさもに、枕方後方に立ち對ひ、泣かじさすれさうつ蟬の、うつゝが夢か、うつゝにも夢にもあはれ化野の、露に先つなき母の、空しき骸にから撫子か、常なき風を身にぞしろ、荼火にはあらぬ燕火も、暗き迷を照らすや、さやうやく納むろ轎を、棺に換ゆる桐の杖、折れてかひなき母の恩、おくらんさするに彌重く、もろ肩入れて舁擧ぐれど、思ひ過りて嗚咽ろ、兄は銜珠の病める鶴、種は浮木に漂ふ龜の、生死流轉の眼前、富巌河をさして急ぎけり。

兩孝子が殘懷悲泣せる狀態を、眼前に髣髴せしむる事の巧妙なる、非凡の靈筆といふべし。今、孝子の母の遺骸を水葬する條を讀者に紹介して、此の篇の居を結び、更に改めて他に及さんとす。

……龜鶴はさかくして、母の亡骸を河原へ舁きゆく程に、天はほの〳〵さ明けたり。貧しきものは足ろこさなしろにもあられど、貧しきを生平さすれば、憂きに堪ふる事もあれど、親雲上接司さ呼はれたる人の子が、その母を葬むろに、棺もなく導師もあらで、兄弟これを舁くに吊ふ友もなく、烏に鳴かれ犬に送られ、やうやく水際に轎をおろしすゑて、きのふのわれを思ひ出づれば、淺ましき事いふべうもあらず、此の河水は涸れぬさも淚の乾く瀨はあらじさて、兄弟もろさもにかき口說ていへりけるは、抑も家君は頗忠にしてしば〳〵君を諫め、國の患をもて身の患さし給へろに、良藥却りて苦しさ

厭はれ、寃枉に命を殞し、家滅れ妻子眷屬離散して、操節正しき母公さへ、杜騙殘毒なる老婆に殺されて胎内の子をさられ、親の像見なりさて、年来秘藏し給ひたる寳劍さへ奪ひ去られし、過世のあやしき業因なり。およそは誠あるものを、神明かならず衛り給ふ、人もいひわれもしか思ひつるに、そは虚言にてありけるなり。老弱不定常なき世に、病にてむなしくなり給はゞ、思ひたゆる事もあらんに、五日が間に二親ながら非命にこの世を去り給ひて、迹に殘れる憂身のすゑは、何處へ流れゆく秋の、あらしの木の葉かくまでに、凋落果てゝは迍邅も、心ばかりに手向の水を、受け得て三熱の苦難を脱れ六觸の垢穢を雪め給へ。水清ければ魚住ます、風靜なれば船行かず。限なき哀別夜鶴旅に悲鳴し捨てがたき、情愛生離殼を脱落す、心催れ腸爛れて、哀戚の歎言下に盡くすべからず、希くはうけ給へ。さまつり了りて兄弟か、河原にはたさふしまろび、聲を惜まず泣きにけり。

勸善懲惡を主として作れるなれば、いづれも馬琴の筆になれるは、終りに至りて善者は榮え、惡者は亡ぶるなるが、かゝるにつけては其の結構の無理なるかたおほかり。或は鬼神を説き妖怪を談ずる事之れなり。此の弓張月は、さる方は少き作なるが、猶後篇に至りて朦雲を出せる事、明治の眼には、余りに疎くて、うるさしといふべし。故に今筆をこゝに止めん。以後猶續出する分は簡單を旨として、變化多からしめんことを期す。

（以下次號）

茶話それ〳〵艸

故木崎　得庵述

出稿人孤崎庵不羨

關　葦雄

時雨月の頃物集めといふ所を過て、ある山里に尋入る事侍りしに、遙なる苔の細道を踏分て、心ほそく住なしたる庵あり、木乃葉に埋るゝ筧

の雫ならでは、露おとなふものなし。水屋の棚に茶具など程よくかざり、さすがにすける人の志し深くかんじけるに、かたはらを見れば、しろかねに迷ふ天秤といへるもの所持したり。是にて、興をさましたり。

不羨曰、天秤を所持するは、日用欠べからざるの一用具なれ共、茶道は、徳義を墨守するを以本意とするもの故、隠頓者の主義より言ふ時は、本文至極せり。秤量の匁分厘を爭ふは、商法家の事ならん。





花咲の翁

わらはべのものがたりにいはく、老いたる夫婦、慈悲をもて旨とするありけり。かひたる犬のつまづく所を堀りて、思ひもかけず、金を得てき。又、翁が隣に、腹あしき夫婦ありて、これを羨み、わりなく、かの犬をかりて大路をひきありくに、跌くことなかりしかば、引きたふして、その處をほりて見るに、黄金はいでずして、きたなき物あまた出でにければ、うち腹だてゝ、犬を殺し道のほとりなる小松のもとに埋めたりしに、その松俄におほきになりつ。翁これを臼に挽きて、麥などつ

くに、麥は底よりわきて、物へうつし入るゝに、盡くることなし。隣のをとこ、又、これを羨み、かの臼をかりて、麥をつくに、麥はみなくだけて、粉になれば、ますく〵怒りて、臼をうちくだきつゝ薪にしたり。

翁、また、かの臼の灰をとりて、枯木に花をさかし、國の守より、金銀、衣裳など、あまたの恩賞たまはりて、花咲の翁と召さる。隣のをとこ、又、これをうらやみ、かの灰をもて、枯木に花をさかせむとて、つかみて枝にふりかくるに、花はさかでその、灰國の守の眼の中にいりにければ、從者ども「やすからぬ事かな」といきまきて、手ごとに、いたく打ちこらせば、忽頭をやぶられ、血にまみれつゝ、がうじて逃げてかへるを、妻なりける女、門より遙に見て、あな、わが夫は、守より紅の衣などあまたかづけさせ給へりと悅ぶ程に、近くなるまゝ、よく見れば、衣にはあらで、血に染みたるなり。をとこは、やがて病みふして遂にむなしくなりたりといふ。(瀧澤馬琴)

自轉車

山岡愛操

天津みそらを我がものと
　西に東にかけりとぶ
鳥のつばさも及びじな
　矢よりもはやし馬よりも」
智恵をちからにふむ足の
　まにく〵めぐる小車や
めもくるめかむいきほひに
　ゆくてをさしてまつしぐら」
とび來るまゝに風をきり

響も高き鈴の音に
驚かされて顧り見つ
あなやと叫ぶつかのまに』
いつか過ぎけりまのあたり
影ははやくも雲かすみ
あとかきゝえて地にのこる
轍のあとは一文字』



ねむけざまし

二世後咲 譯

●興をとゝむるもの

○月ゆきを賞づる席にて、米價の騰貴を説く。 ○八月十五夜に、くもりはてたる。 ○へだてなき朋友達と、ものがたりの最中に、知らぬ、にくさげなる顔したる人に、はいりこまれたる。 ○うちあげ烟華の、ドンといひしかど遂にひらかずて下りたる。 ○はれの酒宴に、其の主人の酒を吝みたる。

●難を重ぬるもの

炎暑きびしきをりから、酒をくみたる。 ○難破船の大かぜにあひたる。 ○冬のさなかに水中におちたる。 ○ひとり子の不孝者。 ○容姿にくさげなる妻の、嫉妬つよき。 ○聲あしき人の歌。 ○物しらぬもの丶、ものしりかほする。

むかし、與太郎とよべる若者ありけり。ものしりがほすることなむ、いみじう好きたりける。一日、一老人に、武藏國と下總國と兩國にかけたるにてリヤツゴクバシといひ、後方から見れば法衣のゴトク、前方から見れば羽織のゴトク、故にジツトクといふことを聞き知り、いで、わが博識をあはして、おさろかさばやと、知人なる熊八の家に馳けつけぬ。さて、あいさつもそこ〱に、

イヤ熊八、オヌシ両國橋のいはれを知れりや。よもや、知るまじといひければ、熊八は、また例のと、まづ、フフンと鼻にてあいさつし、さて徐に二つの國にかけわたしたれば、両國橋といふ由緒を說きけり。與太郎案に相違し、彼あるひは、我が老人より聞くところを、竊聽せしにあらずやと、いさゝか、ひるみたれど、なほ、例のこゝろは容易に折れず。然らば、彼の隱居連の着らるゝ十德といふ名のいはれを知れりやといへば、これは知らずと答ふ。與太、たちまち大得意になりて、

イヤ知るマイテ知るマイジ。オヌシ達のあきめくら連中の知るとならずサ。エヘン、しざりならうぞカ、そもそも十德といふは、後方から見れば法衣の……、ウヽ法衣の……、オヽやうだ。前から見れば羽織のやうだ。やうだやうだでジッ……、ウンニヤ、やうだやうだで十德といふのではないぞよ。ソレ後方から見れば法衣に……、法衣に似たりよ。前から見れば羽織に似たりよ。ソレ、ニタリニタリで……、ニタリニタリで……、イヽニタリニタリで、これは●シタりだといひければ、熊八はもとより、家の人こぞりて、はらをかゝへて笑ひければ、さすがに、與太も今は、いさはづかしうなりて、わが履ものをあわてざま懐中におしいれ、顔をあかうして逃げ出しきとぞ。

上野のさみだれ（上）

清溪

雲にまがひし梢の花は、何時しか消えて、青葉の陰、漸く深く、菱の若葉をたゝむ漣波も、はや心にとまる頃とはなりぬ。今日は五月十五日、この日頃降りつゞきし雨の、今朝しも名殘なく晴れたれば、連日の徒然を慰めんと思ひ立ちて、唯一人、本郷彌生町の寓居を出でぬ。そこともなきそゞろあるきに、暫らく時を移しゝに、いつのまにか不忍の池の邊に出でたり。見渡せば、新綠滴らんばかりなるに、屹然たる洋風の建物が木の間に立

てるもおくゆかしく、池の蓮の漸く伸びて、風にゆらるゝも、いと興あり。花の眺に較ぶべくもあらざれど、また目覺むる心地して、得もいはぬ景色なり。黄塵萬丈の都の中に、かゝる處のあればこそと、獨心にうなづきつゝ、やがて、東照宮の石階を昇り、廟を拜して、それより石燈籠の數多ある間を通りて、新鮮なる空氣に滿身の英氣を養ひつゝ、大鳥居のあたりより、右に折れて進み入りしに、間もなく、名高き黒門に至りぬ。三十餘年風雨にさらされて、見るかげもなき小門なれど、こゝかしこに歴々たる彈丸の痕見えて、當年苦戰奮鬪の狀、今尚、思ひやらるゝ計なり。こゝを過ぎて、淸水寺のあたりより彰義隊士の墓前に至りぬ。何となく、昔の忍ばれて、哀れに覺えたれば、打よりて默拜し、暫らくは立ちも去らざりき。思へば、そのかみ、幾多の勇士は、一朝順逆を誤りて、よしなき戰場の露と消えしとはいへ、徳川幕府二百餘年の鴻恩に報いんとして、心ならずも、王師に抗し、烏合の寡兵を以て、二十餘藩數千の大軍にあたり、目覺しき最期を遂げて、徳川末世の花と散りしは、さすがに、三河武士の名殘を止めて、あはれにも、また、ゆかしからずやと、坐ろに、懷舊の情に堪へねば、悵然として、佇みたる折柄、年の頃は、五十路をや超えつらむ、髮は切り下げに結び、身には、小紋の袷に、酢漿の紋つきたる黒棧の羽織を着たるが、やゝ久しく墓前に禮拜して、いとも感慨に堪へぬが如くと見かう見つゝ、暫く時を移しゝが、やがて、靜々と、こなたに歩みて、杉の老樹のもとに立ちたる、小やかなる草の屋を音なひぬ。杉本ぬし杉本ぬしといふに、中より永井樣か、よくこそと障子を開きて、請じ入れぬ。予は、この婦人の何と

なく、氣高くて、仔細ありげなるに、心にくゝ覺えて、尋ねきかまほしとも思ひたれど、便宜なければ、止むことを得ず、心を殘しつゝ、こゝをばやがて立ち去りけり。

その次の日曜日のことなりき。予は、また、上野に遊びけるに、摺鉢山の邊にて、ゆくりなくも、予が舊友某といふに逢ひぬ。共に打連れだちて、歩みしに、彼はいへり、今日は約せしことのありて、このわたりに尋ぬべき人の侍るなり。君も來たまはずやといふ。そはいづこと問ふに、山王臺の杉本某なり君は、未だ知り給はずや。彼こそは、當年彰義隊士の一人として、奮戰せし勇士なり。今は、墓側に小庵を營みて、朝夕同志の靈を弔らひ、身は清貧に安んじて、詩歌を弄び、吟風嘯月に餘念なきなりと、語るに、予は始めて、彼の杉本某が履歷をきゝて、いとゞかの草庵のゆかしく覺えければ、喜びて、伴ひけり。かくて、主客兩人が盡きせぬ物語に時の移るを打忘れしが、此の日歸らずも哀れなる人々の物語を聞くことを得たりき。

こゝに上野山に立て籠りて彰義隊士の一人に永井禎之進といふものあり。色白く、丈高くして、眼すゞしく、眉秀でたるが、性來武藝を嗜み、早くより劍客、桃井某の門に入りて、拔群の譽ありき。さる上に性質至て温厚にして、母に孝養の聞えあり。過る年に、仝じ、旗本の女を迎へて妻となしぬ。名をば松尾といひて、なよ竹のたわらかなるが中に、其の名の如く、常盤の操も備はりければ、琴瑟の情濃やかにして、老母の喜も一方ならず、菅の根の永井の家の春風の暖なる心地して、人も羨むばかりなりしに、淵瀬測り難きは、人世の常去ぬる慶應二年十月、將軍慶喜公京都二

條の城に於て、諸臣の建議を容れて、大政を奉還したまひしより、人心の動搖甚しく、實に容易ならぬ時勢とはなりぬ。されば、禎之進は將軍の御供して、京阪の間に往來せしが、明れば、明治元年正月端なくも、伏見鳥羽の戰起りて、幕軍潰走しければ、禎之進も、力なく將軍に扈從して、江戶城に還りけり。然るに、其の後慶喜公は、勝氏の說をいれて、一意恭順の外なく、遂に寬永寺に入りて、髮を剃り、僧服をさへ着給ひ、つゝいて江戶城を明渡して、水戶に退きたまひしかば、禎之進等は無念やる方なかりければ、二月十七日天野八郎等の同志と共に四谷鮫橋に會合し、神文を認めて、同盟を結び、禁闕に奏して、君家の寃を訴へんとし、つゝいて再び淺草本願寺に打集ひ、何れも、死を決して、德川氏の爲めに盡さんとを誓ひ、こゝに始めて、彰義隊てふ名の下に一團隊は成り立ちたり。

時は、是慶應三年五月十四日の事にてありき。豫てより、上野山內に屯集して、飽くまでも主家の爲めに殉ぜんと、決心したる一千餘人の面々には、何れも、慷慨悲憤の涙を揮うて、曰く、惡つくき薩長の奸賊共、猥りに、朝威を藉りて、執念くも、德川の社稷を亡さんと企つるこそ心得ね。上樣には、彼等が術中に陷り給ひて、殘念にも、朝敵の名を負ひたまひしは、返す〲も殘念至極、此の上は、御菩提所を打ち守りて、潔よく、討死するより外はなし。明日にも官軍攻め來らん。防戰の用意惰るなと勇み勵まし待ちかけたり。其の人々には、大久保某、天野八郎、松本某、菅沼某等を始めとして、二十餘隊を組織なし、要所々々に配列し、不揃ながらも、數門の舊砲四斤砲など配付して、敵やよすると待ちかけたり。永井禎之進

は、卍字隊の組頭として、數十人を引率し、車坂門口をぞ守りける。



遠時鳥　東久世通禧

夕月のかけもくもりてほとゝきす
とほき初音もさやけかりけり

潮あむる所　佐々木高行

沖つ浪よするいそへにうちむれて
こゝろひろくもあそふもろ人

朝梅雨　高崎正風

朝からすなき渡れともさみたれの
あまとのひまのしらみ兼たる

枕上夏月　久我建通

端居して風まつよひのたまくらに
さしくる月のかけそすゝしき

山寺子規　鍋島直大

山寺のかねの音たえてしづかなる
そらにひと聲なくほとゝきす

夏池　諏訪忠元

いつの間におふるまこものかすみえて
くひななくへくなれる池水

郭公　岡部譲

ほとゝきすまちし月にはつれなくて
おもはぬよひの雨になくなり

深山瀧　宮地嚴夫

おく山のましらの聲にましりつゝ
聞ゆるたきのおとのさひしさ

夏夜雨　北郷久政

ほとゝきすなく一聲にゆめさめて

夜ふかき雨のおとをきくかな

待時鳥　坂正臣

山のはに月かたふきぬほとゝきす
なとて今宵はなかぬなるらん

夏露　千葉胤明

水無月の照日つゝけとあさな〳〵
ふめば露ありにはのしばはら

簾外に風鈴かけたり　加藤清義

青すたれかけし軒端はよそめにも
すゝしくみえて床しかりけり

安藝國沼田下村よし
女の傳をよみて　佐々豊水

百歳にあまるよはひの父母に
つかへしまことたぐひなきかな

風前螢　井上頼文

さゝの葉の露には醉はて吹風の

心たかくもとふ螢かな

水雞　近衛貞子

ほたるおふ子らは歸りし里かはの
堤のかけにくひななくなり

山人夕立にあへり　鍋島榮子

さしてゆくみちいかならん山川の
はしたにかゝるゆふたちの雨

葦間に船とまれり　南郷柳子

さみたれにつなく芦まのとまり舟
晴るゝ空のみまちわたるらん

船はたに鵜たてり　柳原愛子

魚ねらふこゝろありとも見えぬ哉
なきさの舟につはさほす鵜は

祇園祭山鉾立並ひたり　小池道子

ぬけいてし神のみいつも山ほこの
連なるうへにあらはれにけり

川瀬に齋串たてり　北島以登子

御祓川なつはらひせしあとならし
　つねよりみつの涼しかりける

刈夏草　松平峯子

なりはひのひとまひとまに露分て
　刈れはあとよりしける夏くさ

漁村網干したり　小川直子

朝なきにあまは遠くもいてぬらん
　うらの苫屋にひとかけもなし

紫陽花　服部磯子

面白くいろをかへてもにほひけり
　さつきのにはのあちさゐの花

雨後夏月　河村重子

ひとしきり暑さあらひし村さめの
　名殘すゝしくつきいてにけり

郭公稀　大河内一子

雨そゝく夕暮ことにほとゝきす
　鳴て過行聲のまれなる

飯田いね子

ほとゝきすをちかへりなく頃よりも
　稀に聞夜のなつかしき哉

月前水鶏　南部銈子

さみだれもこよひははれていけのおもの
　涼しき月にくひなゝくなり

諏訪晴子

つきみつゝかたらん友をまつのとに
　たゝくくひなのこゑきこゆなり

撫子露　南部蘭子

あさな夕な置しら露をちふさにて
　花咲までになれるなてしこ

松平浪子

白つゆの玉のかさしのおもければ

なやましげなるなでしこの花

名所螢　増山三重子

みやひなる友にさそはれおほみやの
螢かりして一夜おなしぬ

湖辺螢　南部明子

すはのうみやよるさゝなみに涼しさの
かげをうつして飛ほたる哉

建部縫子

あふみなるみつうみくたすふなひとの
さほにあやなし螢とひかふ

扇風　諏訪直子

手にならす扇のうちにいかなれば
あつさをはらふ風こもるらむ

くさ〴〵

赤松景福

寄筆祝

たのしさをかきも盡さずとる筆の
命毛ながくいませとぞおもふ

寄鶴祝

なれも又かねてちぎりや沖津洲の
えら洲にあそぶ千代のとも鶴

寄鏡祝

浦にすむつるはものかは増かゞみ
幾よろづ代の影のうつれば

寄茶祝

山城のうぢの木の芽をはるごとに
君はつみつゝよろづ代をへむ

寄機祝

をとめ子が千屯八千屯おるはたの

綾にたのしくきみは千代へむ

新室祝

ゆるぎなき君がこゝろの葛根もて
この新むろはむすびいでけむ

寄湖祝

近江のや眞野のうらわのはつ尾花
千年のわきをまねけとぞ思ふ

齋宮村にて

いにしへの深き根ざしの竹のみや
代々にくちせぬ跡もかしこし

綾川をわたるに昔父とこゝに宿せし時綾川一夜枕頭聲といふ詩を作られしことを思ひいで

あやかはのあやにかなしな行水の
音ばかりこそむかしなりけれ

雜報



●東宮殿下演藝御覽　過日中　皇太子殿下には當時歌舞伎座にて、興行せる外國人自轉車曲乘の技藝者數名を、青山御所に召させられ、御庭苑にて、數番の技藝を演ぜしめて、御覽あらせられたり。當日は同妃殿下を始め奉り、有栖川宮威仁親王、同妃、閑院宮妃、山階宮菊麿王各殿下、伊藤侯、田中宮內大臣、香川皇后宮太夫、戶田式部次長、黑田武官長、高辻東宮侍從長、佐々木伯、橋本男、林子、其の他宮內省、幷に東宮職各局部長にて、公務に差支なき者には、御陪覽仰付られたりと承りぬ。

●御祝儀　いにし廿六日は、東宮妃殿下の御誕辰につき、兩陛下よりは御祝儀として、青山御所へ、御酒肴等を賜りたりとぞ。

●東宮妃殿下の御祝日　いにし廿六日は、東宮妃殿下の御誕辰なりしに付き、午前八時頃より青山御所に參賀せし者多し。宮中よりは、德大寺侍從長、香川皇后宮太夫、宮內省よりは、田中宮內大臣、其の他、各大臣九條公、幷に黑田武官長、高辻侍從長、萬里小路、正親町、吉見、生源寺、富田等各女官は親しく殿下に拜謁の上當日の御祝詞を言上げ奉りたる由なるが、御近侍の人々には、御祝酒をば賜はりたりとぞ。

●服部中佐

こさきやく唐國はみたれくして、所謂、麻の如く、取りつかれんよしもなきありさまは、はや諸媛も知りたまへる事にて、又、其の國の太沽に、各國連合軍の戰ひは始まり、我が海軍中佐服部雄吉主の、名譽の戰死をとげたる事も、既に知られたる事ならん。廿六日發行の富士新聞に、中佐が性行のくはしきものを揭げられたれば、此處に轉載して、諸媛と共に、同氏の英靈をとむらはんとす。

▲兩親及幼時　中佐の家は代々、鹿兒島縣の御小姓格にて、父は京都伏見同藩藏屋敷の役人なるが、中佐は父の在勤中、母胎に宿り、生れんとする間際に、不幸にも父は逝去したりしかは、母の手一つに養はれ、漸々七歲となりし時、生母も又父の跡のを追ひて逝去りたれば、叔父の家に引取られたるが、薩摩武士の事とて、流石に武骨に育てられしが、上方所の風に移りしにやあらん、中佐は武骨の中に緻密なる所ありて、同藩子弟の粗暴一天張なると同じからず、長ずるに從ひ、小學校へ通はせしに、他科よりは、殊に數學を好みて、斯業に長ぜしかば、叔父は理學者となさん積にて東京に上せ、攻玉社へ入れしが、同社にては、常に上

位を占め、屢々褒賞を受けしことあり、又算盤も中々に巧みなりしと。

▲性質及娛樂　中佐は、勇にして、容易に物に驚かず、徐に事を圖りて、後之を處理し、又寡言にして、人に對しても、濫に語らず、初めは軍人には如何あらん抔噂する者ありしが、漸次に技倆を表はして、天晴武功の名を揚ぐるに至れり。氏は別に娛樂といふものなきも、撮影は好なりしと覺しく、閑散の日は、之を攜へて、郊外に遊び、或は航海の際、陸に上りて、其の地の風光を撮取り抔したりと、又冬日には、銃を攜ひて、近傍へ出獵くることもありし由なり。

▲吉井伯の談　二十七八年役に吉井伯は、秋津の副艦長として、中佐と同乘し居たれば、昨日社員、伯を訪うて、其の逸事を尋ねしに、伯は余と服部とは、六ヶ月間、同艦内に起臥し、（伯後に武藏艦に移る）たるか、何分地位の違ふことゝて、親しく語りたることなく、會々食堂抔にて、面を合するも、例の沈默なる性質とて、上官に對する禮を守り居たれば、打解けたることなし。されど、事務に熱心なるは、常に感じ居たる所にして、今回の戰死を聞きては、洵に愛惜の情に堪へず。余は深く彼を知らねども、其の沈勇と寡默と熱心なりし事は、他に向つて語るを得るなりと。

▲令兄と妻子　中佐には、一人の令兄あり。即ち目下金澤旅團にある歩兵少佐服部直彥氏なり。中佐の夫人は築山中佐の妹にて、名をもと子と云ひ、去る二十七年三月夫婦の間に、つねと云女子を擧げしが、十月計りにして沒り、其の後一子をも設けざれば、不幸にも、其の跡を繼ぐべきものなしと。築山中佐は、目下新造軍艦受取の爲め、英國に赴かれ居れば、未た、此の報を知らざるべく、夫

人は亡夫が、此の程迄、佐世保海兵團の副長なりしより、同地に一家を構へ、其處へ、住居し居たるが、電報にて今回の報を知り、大に驚き、目下上京せんと準備し居れる由なり。

●戰死次第　服部中佐は、太沽攻擊に於て、勇奮先登して進み、第一に砲臺に上りしも、後れて至りたる英艦アラッリチ艦長の砲臺を攀ぢんとして、甚だ危險なるを見、手から之を扶け登らんんとして、其の身の難を顧みざりし爲、却て敵彈に倒れたるなりと、英國水雷艇長、長崎にてかたれりと。

●葬儀　中佐の遺骸は、肥後丸にて佐世保に送致し、二十四日同地に於て、嚴かなる葬儀を營みたり。今、其の次第を聞くに、當日午後二時水交社出棺、棺は軍艦旗にて蔽ひ、其の上に故中佐の大禮服、及び、正帽劍等を飾り付け、开を砲車に載せ、三十餘名の水兵引きて、日宇村なる海軍墓地に送り、喪主陸軍步兵少佐、服部直彥氏（實兄）始め、故中佐の未亡人、及び、親戚石田中佐森少佐、其の他鮫島海軍中將、有馬同少將、山根陸軍少將、各艦長、井上侍從武官以下、凡て二千餘名の會葬者の外、儀仗兵二中隊、棺に從ひ、即て葬地に達するや、辱なくも華頂宮殿下、親く玉串を御提げ遊ばされ、鮫島司令長官弔詞を讀み、弔砲三發を打ち揚げて、滯りなく葬儀を終りしは、午後三時半なりしと云ふ。

●先登の勇士

いにし十七日あかつきおかして攻めのぼろ、世界强國のつはもののの中より進出て昇る朝日に皇御國の錦の御はたたひるかへせしはいさもたゝしきふるまひなり。其の第一先登者た白石大尉なんいへる。同新聞の記する所によりて、其の人さなりなものかたらん。

▲兩親及び兄弟　大尉の父は作州津山の藩醫にして、柴田良智といひ、母は豐前中津の藩士、甲

斐氏の女にして、しち子(五十四)といふ夫婦の間に、五人の男兒ありて、何れも軍事に従事し、大尉は其の次男にして、長男音江(三十)は、目下呉の造船所にあり三男廣江(二十五)は、元廣島砲兵第十一聯隊にありて、満期となりしが、今回現役を志願し、現に福島少將に従ひ、四男春江(二十)は兄音江に従つて、呉に五男菊枝(十八)は江田島海軍兵學校にあり。

▲養子となる　柴田氏の一家は、久しく津山に住居ひしが、維新後、東京に移り、明治二十一年、末子、春江が六歳の時、父親逝去りしかば、みち子は、五人の子息を連れて、實弟中の年長なる、甲斐織江方に寄人となり、此所にて子息を育てあげたり。織江は、京橋區山下町にありて、海外輸出商を營めるが、其の弟鐵三郎は、海軍少佐にて目下呉に居れり。是より先き、大尉は、四歳の時、府下豊多摩郡、中澁谷白石豊氏(芝虎門琴平神社神官)より父方の親類の近所に住める人を頼みて、養子に望み來りしかば、其の方へ遣はされ、是より白石姓を名乘ることとなりたりと。

▲活潑と孝行　幼時より活潑剛情にして、母の手許にある時さへ、手に餘る程なりしが、養家へ赴きてより、養父豊も負け嫌ひの姓なりしかば、双方の間に口論絶えず、或日養父より叱られ、口惜しさに實家へ逃げ歸り、實母より、亦叱られて、餘儀なく養家へ歸りたる事あり。成長するに従ひ益々負けじ膽強くなり、如何なる事ありとも、決して涙杯滾すことなく、或時、犬に噛まれて大怪我したるを、人に知らせで、打棄て置き、又亂暴を懲さんとて、一間に押籠められしに、引窓より飛出したる事杯あり。されど案外に、亦優しき所ありて或年の夏、實父病に罹りしに、學校の暑中休暇を

幸ひに、己一人、夜も寢らずして、看護しだることありしと。

▲官歴と海軍　養父、豐は、神官となして、己が跡を繼がせん積りなりしに、大尉は軍人を志願して止まざれば、其の意に任す事とし、十七の時、海軍兵學校に入りて、二十七年業を卒へ、翌年日清戰爭の際千代田艦に乘りて、豐島沖の戰に臨み、功を以て少尉となり、一時賜金百五十圓を賜はり其の後天城、松島、葛城等諸艦に轉乘し、昨年十月大尉に昇進して、鳥海艦の分隊長となり、太沽へ赴き、去る五月笠置艦に轉じて、今回の戰に臨みしなり。

▲趣好と手蹟　社員昨日、母堂みち子を山下町に訪ねしに、みち子は、今回の功名は、實に意外にて、新聞社の方々の來訪せらるゝにて、初めて知りし次第なり。鼓江は武骨者なれば、趣好とて別になけれども、水練、擊劍、柔術等は、幼時より好にて、昨年秋、鳥海艦に搭じて、太沽に越年せし時、彼地は御承知の如く、寒地にて氷二尺五六寸も張り詰めたれば、鼓江は此上にて、氷滑りをなすを、上なき樂となし、同十一月着せし書簡の中に、此事を記しあり。又去る二月（即ち支那の正月）國王に拜謁せし由にて、當時の書狀中に、此の事を報じ、儀式の莊嚴なる、我名譽と共に忘るゝ能はざるなりと記しありしとて語れり。

●父子の赤誠　岩手縣九戸郡輕米村大字上館に、菅原熊之助(五十六)と云へる者あり。其の父某は去ぬる廿八年の秋、皇太子殿下御不例に渡らせらるゝ由を新聞紙上にて拜聞して、最も畏れ多き事と感激し、八十八歲の老体を以て、三七日間水垢離をとりて精進潔齋の上、其の滿願の日、即ち廿一日目には氏神の祠前に實れる林檎の果、五顆を取りて、

其の三を祠前に供へ、恭しく神前に額きて、只管に御平癒を禱り、畢りて後、餘りの二顆を自宅へ携へ歸り、軈て熊之助を膝近く招いて言ふ樣、汝明日發足して、東京へ上り、此の林檎二顆を謹んで、皇太子殿下に奉献せよ。願意、若し達せずば、再び吾れを見る勿れと、嚴かに命せしかば、熊之助は、右の林檎を捧け持ちて、出京せしかど邊陬の野人、爭で、献納の手續きなど知るを得べき、宿屋の亭主の敎ふるまゝに、先づ神田區役所に至りて手續を尋ねし處、狂人と怪まれ其の他の役所に行きしも、此れ又刎付けられ、內務、農商務等の諸官省を歷訪して、愈々瘋癲者と認められしかば、途方に暮れしが、此上は高島嘉右衞門氏の判斷に據て、成否を卜せんと、軈て氏の門を叩いて、來意を告げ、判斷を求めしに、事成就すべしとありければ、此より、一層力を得て、一たびは大藏省に行き、夫れより宮內省に出頭せしに、縣知事の證明を取り來れと諭されて、再び失望の淵に沈める折から、時の同縣知事在京せる由を聞て、再生の思ひを爲し、直ちに其旅館を叩きしに 今度は村長の證明を取り來れと命ぜられて、三たび落膽せしが、遂に東京府廳の好意によりて、籍を東京に移し、やう／＼献納の手續きを爲しけるに、奇特に思召され、直ちに御聞屆けありしかば、熊之助は、面目身に餘りて、歸鄕し、父子餘りの嬉しさに、唯相擁して泣きけるとぞ。左る程に父は、その其の翌年身歿りて、夫れより四年を經て、本年五月十日、此度の御慶事あり、之をしも默して止めば、亡父の靈嘸や本意なくも思はんと、熊之助は、復も遙々と出京し、種々苦心の末 兎に角、宮內省に出頭して、先年林檎獻納の事より、今度上京の次第落ちもなく陳狀せしに、喜びを申上げ

んどならば、書面に認めて差出すべし。其の手續きは、云々と事細かに敎へ諭され、勇み喜びて、旅宿に立歸る途次も、元來無學文盲なれば、如何なることを書きて、御慶び申し上ぐべきやと思按に暮たる折しも、不圖眼に映きしは印判屋の看板なりけり。

熊之助は、不圖思付きて、立留まり、印判屋は文字を以て、世の營なみとなすものなれば、之に賴まば、埒明くべしとて、軈て印判屋に入り、御慶事奉祝の微衷を致したければ 然るべき樣取計らひ有たしと賴み入し處、开は歌俳諧など作る人に賴むこそ早道なれと敎へられ、左らばとて、同店を立ち去り、歌人の宅を音づれんと、各町を歩く内、神田明神境内にて、端なくも一人の僧に逢ひ、僧侶は學問のあるものなれば、試みに尋ねて見んとて、其の跡を追行き「悉達太子の涅槃の時に蟲類も出る、まして祝ひの御世には」といふことは目出度き事になりませうかと、檀那寺にて聞覺えし說敎の中の言葉を思出し、唯だ出鱈目に問ひかけしに、僧は振返りて、何の事やら解らずと答へぬ。兎に角唯今申せし事を筆記して、下されと乞ひ、鉛筆にて紙に認めて貰ひ、扨之を、此の儘宮內省に差出すべきやと思ひしかど、尚は不安の廉ありとて、專念に俳諧の宗匠を尋ね、廻り、遂に本鄉湯島天神町二丁目の松本鷹齋といふを訪れしに、右の文中に涅槃の文字あるは祝詞として相應しからず。外に目出度き句もあるべしとて、「相生の松や盡せぬ御ためし」と奉書紙に書て渡しければ、熊之助の喜び斜めならず。去月十六日東宮御所に出頭して、謹んで獻上し其の歸途鷹齋の庵を訪れて、篤く禮を述べたる後、精神一到、茲に成就して、誠に、此の上の望みなく、親父も嘸や滿

足に思ふならんとて、背に負ひたる風呂敷包を解下し、其中より取出したる一基の位牌は、此れぞ亡父の戒名を記したるものにて、熊之助は、恭しく其の前に額き頓て擧げたる、兩の眼には、涙の浮めるが見えしとなり

●貞婦しぎ子　四谷區荒木町廿七番地なる、元大審院判事、筧元忠氏の妹しぎ子と云へるは、元福岡縣中學校に英語の敎師を爲し居りし福井粲といへるに嫁ぎ、夫婦なか睦しく世は春と過ぎ夏となり、早苗取る間に、早や秋とはなりて、淋しき空を喞ち顔なるが多かるに、此の一家のみは、何時までも、彌生の霞引て、目出度さ言はん方なかりしに、所夫粲不圖せし事より腦病に罹り、次第に重りてしぎ子が、力の限りなる心づくしも、其の効あらず、終には、精神病に陷りけり。左れば、所夫粲は、最早、敎職にあるべきにあらねば、官を辭して、浪々の身と爲り、とこしへに春のみ思ひし家庭は、俄に凩吹き荒み、冬の如く爲り果て、悲哀の裡に、日を送りけるが、兄なる元忠氏より、我が許に來りて、心の儘に養生させよと、懇ろなる文の便りありしかば、しぎ子は、又なく打ち喜び、急ぎ行李を調へて、狂氣の闇にさまよへる、所夫を勵りつ、袖の湊を舟出して、東京四谷なる兄の許に來りしは、今より十四年前の事なりき。斯て、しぎ子は、何にもして、良人の病を全癒せしめんと、獨り、看護に寢食を忘るゝのみならず、或る時は、神に祈り、或る時は、自ら好めるものを斷ち、偖は、灸點などをなし、有ゆる手段をつくして、治療せしも、更に快うなる色も見えず。我が務の足らはぬかと、なほも一心になりて、介抱し、人の樂しむ花の朝も、世は興ありげなる月の宵も、寸時も、外出せず、只管所夫の病床に侍し

て、看護に餘念なく、嚴冬手足の凍る時も、所夫の普通ならぬ病症にしあれば、ふかく氣遣ひて、火桶を避け、又群がる蚊に、蚊帳なくては得堪へぬ時も、所夫蚊帳を嫌ふて、此れに入らねば、夜もすがら、蚊を拂うて、寢らんともせず、將、又、所夫に食を進めて、少しも用ゐざる時は、自らも、食を減じて、其の身に障礙あるや否を試し、斯の如くにして、日となく夜となく氣の狂ひたる所夫の病床に侍する事、茲に十有四年一日として怠りし事あらず。今尙は神に祈願を籠めて、良人が萬一の平癒を請ひつゝありとぞ。如何に敎育ある身とは云へ、斯くまでの貞實は、比類稀なりと、人皆感せぬはあらじとなむ。

●舊恩に酬ゆ、　越後柏崎の內藤久寬氏、今まより二十七八年前、乃ち、十三四歲の頃、信州善光寺に旅行中、一人の老婆に會ひ、道連となりて、數日の間、或は、衣服を洗濯して貰ひ、又路費の不足を惠まれ、尙東京までの旅費を與へられたることあり。爾來內藤氏は、其の恩を報せんことを志し、老婆の所在を探索せしが、頃日漸く、其の健在なることを聞知し、內藤氏夫妻より、若干の養老金を贈りけりとぞ。

●孝子　心に孝行の念なくして、然も其の一擧一動、親愛至孝、日夜に父母の事を助け、愛敬を以て、父母の意を迎ふる幼者の孝行は、之ぞ誠に天賦の孝心にして、見る物をして、覺えず感涙を催さしむるなり。今日浮薄の世の中に於て、猶這般の明珠を貧窟に拾ひ得て、其の明光を發揮せしむるといとよろこばしき事ならずや。四谷伊賀町より麴町番町に掛け、嚴冬酷暑の差別なく、道を沒する雨雪を厭はず、茲に五年間一日の休みなく、盲の父の手を引きて、悲しき聲を最憐れに、晝は

煮豆を、夜は辻占を賣り、歩く貧少女あり。四谷區南伊賀町五十九番地加藤藤吉(四十)妻なべ(三十)の長女、お種(十二)と云へる者にて、貧苦に育ち、滋養足らねば、體格は小さく、血色惡く、見るから憐む可き姿なれど、内に包める明玉の輝き見ゆるぞ、いとたのもしき。扨も、此の藤吉と云ふは、至極實體なる男にして、始は、相應なる魚屋を營み、得意の贔負も厚かりしが、數年前重き内傷眼に罹りて、療養怠りなく、家財を賣りて迄、藥餌に財を投じたれど、其の効なくて、終に兩眼の明を失ふに至り、俄盲の感惡ければ、何を家業にせん由もなく、搗て妻おなべは、性來病身にて、年中七分は病床の裡に日を送る程なれば、一家の貧困窮するに餘りあるべし。左ればとて、此の儘空しくあらんには、死を待つに均しき道理なれば、爼、庖丁杯を賣代にして、些少の豆と辻占用の紙を買ひ調へ、昨日迄は市虎と言はれし魚屋に引代へて、今日は、賤しき辻占賣と成り下りぬ。左るにても、盲目の藤吉は、一人歩かん樣もあらねば其の時七歳なるお種に手を牽かれて、覺束なくも晝は煮豆賣、夜は辻占を賣歩く事と爲せしに天は、此の不幸を愍みて、孝子を助け賜ひけん。お種はまた頑是なき幼子なるに、雨の夜、雪の朝を厭はず、父の手を牽きて、煮豆、辻占と呼び、歩く内にも、何やらん打ち囁きて、物見えぬ父を慰め、親子互みに打ち笑みて、樂し氣に行き過ぐる光景、道行く人も思はず、感に打たれて、折りには些と計りの錢を惠みけり。慥れば憐家の人々も、お種の孝行に感激して、我子を戒むる手本と爲し、又お種には彼岸の團子、祭の鮨何呉れと分ち與へて、其の孝心を賞しける程に、浮世の風は如何に荒くも藤吉の一家には、春風常に吹き充ちて、不幸

の内にも、樂しき月日を送りけり。左れば、藤吉夫婦は、皆之れお種の孝行故と、我子ながらに、神の子の如く親愛し、早く婿取る年の來よかしと、月日の經つをもどかしがりぬ。扨、お種は年取るに從つて孝心益々厚ければ、今は四谷より番町に掛けて、人皆彼を孝行豆賣と呼び、要らぬ品をも買ふ程なれば、心なき子供迄、煎餅買ふより、孝行屋の豆賣はんと、五厘を手にして待つ計りなりと。之ぞ孝行の德、人を化するものにして、身は貧賤なる一少女と雖も、其の尊さは、輝く珠玉にも勝るやと云はん。

●女子教育機關の設備調査　全國各府縣に通じ、女子高等學校の設備不完全なる結果年々數千の小學卒業女學生をして、收容せしむること能はす、結局女子をして、修學の好時機を失はしめ、生涯不幸に陥らしむるの實況なるを以て、文部省に於ては、各府縣をして、少くとも、一郡に一個位宛、差當り、二ヶ年程度の女子補習學校を建設せしむることに内定し、過般來、種々調査中なりといふ。

●各府縣師範學校高等女學校寄宿舍取締法類別表

今般文部省普通學務局にて、全國女子師範學校及び師範學校女子部高等女學校の寄宿舍管理注意事項と題する一冊子を印刷して、頒布せらしが、左のごとし

備考

一、本附錄は本局の照會に對する回答書中より輯錄したるものなり

一、本附錄中「高師」は女子高等師範學校「新潟(師)」は新潟縣師範學校「靜岡(私女)」私立靜岡高等女學校の略語なり其他之に倣ふ

一、名稱異りと雖其實質同しと認むるときは同一部類中に記入す例へば「出入檢查簿」と「外出簿」「通信部」「通知簿」の類の如し

一、頭上に△印あるものは將來に施設せんとするものを示す

一、本表に掲ぐる所の學校名左の如し

師範學校女子部ノ部

女子高等師範學校　新潟縣第一師範學校
千葉縣師範學校　山梨縣師範學校
福島縣師範學校　宮城縣師範學校
巖手縣師範學校　秋田縣師範學校
京都府師範學校　岡山縣師範學校
和歌山縣師範學校　德島縣師範學校
香川縣師範學校　長崎縣師範學校
佐賀縣師範學校　鹿兒島縣師範學校

高等女子校ノ部

群馬縣高等女學校　栃木縣高等女學校
私立靜岡高等女學校　京都府高等女學校
奈良縣高等女學校　福井縣高等女學校
松江市高等女學校　私立廣島高等女學校
私立毛利高等女學校(山口)私立愛媛高等女學校
私立尚絅高等女學校(熊本)小倉高等女學校
久留米高等女學校

一、服裝

一、通常なるもの

新　潟(師)　群　馬(女)　栃　木(女)　靜　岡(私女)
山　梨(師)　福　島(師)　秋　田(師)　京　都(女)
奈　良(女)　島　根(女)　廣　島(私女)山　口(私女)
愛　媛(私女)長　崎(師)　熊　本(私女)

二、授業中若くは校內にては着袴せしむるもの

高　師　千　葉(師)　宮　城(師)　岩　手(師)
京　都(師)　福　井(女)　富　山(師)　和歌山(師)
德　島(師)　小　倉(女)　久留米(女)　佐　賀(師)
鹿兒島(師)

三、體操時間中襷若は筒袖等特別なるものを用ひしむるもの

新　潟(師)　宮　城(師)　福　島(師)　秋　田(師)

四、正衣常衣を別てるもの

宮　城(師)△福　島(師)

五、徽章袴制靴を用ひしむるもの

和歌山(師)

六、別に規定せざるもの

靜　岡(私女)　山　梨(師)

二、被服類地質

一般に左の如し

一、衣服は木綿類

二、帶は唐縮緬　繻子綿毛繻子　綿博多　カシメル　メリンス

三、袴は綿毛繻子　毛繻子　メリンス

四、蝙蝠傘は毛繻子

●各地女學校

●私立沖繩縣高等女學校を首里區に設置し本月より開校の件認可せられたり○函館富岡町なる裁縫專門女學館は去十五日第八回卒業證書授與式をあぐ○弘前市高等小學校にては女生徒一般に

袴を着用せしむる事とす○岐阜縣教育會は各小學校女生徒に簡袖着用の事を決して去る十八日より尋常小學校のみ實行せしが父兄の苦情やかまし○大分縣高等女學校は去十三日入學式を擧行せしが同校長視學官田中勝之丞氏は一場の教訓をなしたる上左の生徒心得を頒布したりと

●雜件 ○帝國教育會の夏期講習會に八月一日より二十八日までの内十日間位づゝにて學科は教育學(音樂學校講師中島半次郎)國語學(文學士藤岡勝二)植物學(理學博士三好學)地質鑛物學(理學士佐藤傳藏)社會學(專門學校講師浮田和民)にて講習料一科壹圓拾五錢二科貳圓五拾錢三科以上參圓拾五錢なり○石井泰次郎氏の割烹教場は廣告欄に見ねたる如く經濟料理講習會といふを設くまた同教場にては近々源氏物語五十四帖に因める獻立をなし料理文學の研究をなす筈なりと○治庖會主の赤堀峰吉氏も夏期休業中小學校女教員のために料理講習會を開きて實修の便を圖る由○去十九日今川橋山のゑの古流花友會は出席者十六名一式の菊優等者は荒井氏の菊二重生け中村氏の菊十七輪○東京音樂學校にては本科及豫科へ入學せんとするものゝため七月中旬より三十日間ほど入學試驗準備の唱歌講習會を開く筈○師範學校中學校高等女學校教員檢定試驗志願者は七月十日までに願書を地方廳に差出すべしとなり尙國語と漢文とは今回より合併して一科目とせられたり○言文一致會の目的事業は左の通に定められたり

言文一致を研究する事

一、むつかしき文章を言文一致に書直す事▲二、新聞雜誌著書などに出て居る文一致体の文章を批評する事▲三、言文一致の名家を招いて苦心談を聞く事▲四、標準語を撰む事

言文一致を普及さす事

一、會員はなるたけ言文一致体に書いて新聞雜誌に投書する事

二、會員は成たけ往復文を言文一致に書く事▲三、會員を募集する事(殊に新聞記者小說家などに入會を勸誘する事)

●婦人會 慈愛館といふは醜業婦人の正業に就かんとする者及び貧困のため身を苦海に沈めんとする女子を救ひて之に實業を授けんとの目的にて一昨年設けられしものなるが追々事業の歩を進め入館者も少からずと位置は麻布廣尾町二番地なり○母の會は名の如く母親の務を普く女子に知らしめんとするものなるが過日例會を赤坂靈南坂なる小崎弘道氏宅に開きぬ席上ワージ夫人の有益なる實驗談もありきと○去る二十日四瓜生會の例會を大塚辻町の教育院内に開きかれて故名譽會員稅所敦子刀自の追弔會を營みたり來會者三百餘名山田妙雲郁芳隨圓二師の講話

あり下田歌子女史の税所刀自を吊ふ演説もありきと〇去月廿八日皇后陛下御誕辰の吉日を以て岡崎なる第二師範學校女子部に婦人親睦會を催しゝがかゝる會合は教育上裨益あるものなりとて今回伊東つる子稻垣つる子井深みゆ子氏等發起となり岡崎婦人會といふを組織し去十六日同地高等小學校に發起會式をあぐ〇熱田町なる燒田佛教婦人會も過日與福寺にて例會を開きしといふ〇長崎婦人會は此程市内興善町高善女子小學校に於て諫早町の貞女中山さき女を招待し頗る盛んなる旌表式をあげ終りてさき女に特別終身會員徽章を授與し且同會より金十四圓玉木女子裁縫學校生徒より金三圓玉木りつ子より反物一反を寄贈せり〇日本赤十字社篤志看護婦人會京都支會は追々會員も增加するため今回規則を改正したるが其内重なる條項は左の如し

第一條　支會は日本赤十字社京都支部に於て之を設け本社篤志看護婦人會幹事長監督の下に屬するものとす△第二條　支會は日本赤十字社員たる婦人にして京都支部所管内に住する篤志者より成立す△第三條　支會の目的は戰時軍人の傷病者を看護する學術を習得するにあり且つ之が費用に充つる積金及救護物品を製造する事をも包含す△第四條　支會の主旨は忠愛慈善の至誠を以て國家有事の際婦人が報公の道を表章せんとするものなれば族籍年齡に拘はらず會員たる事を得ると雖も職業幷に品行の如何により入會を謝絶若しくは除名する事あるべし△第十二條　每月第一土曜日午後より二時間例會を開き看護學を教授す△第十三條　每年一回總會幷に修業証書授與式を擧行す△第十四條　授業期を滿二ヶ年とし此期間廿回以上出席せしものに修業証書を授與す△第十五條　既に修業せしものは更に補修科に入り向高等の術科を教授す此年限を滿三ヶ年とし廿五回以上の出席には特に卒業證を授與す△第十九條　入會の申込者あるときは幹事幷に委員先つ本人身上及職業等を調査し會長に申告し許否を定むべし△第二十條　會員は每月金十錢を醵出し之を利殖し戰時救護の費用とす其他金員及物品を寄附するは本會の企望する處なり△第廿一條　醵出金は入金當月より算し滿五ヶ年を經過せば徵集を止るものとす△第廿四條　支會々員は常に勤儉尙武の氣節を養ひ衣服等は必ず質素を旨とし禮讓を重ずる事を期すべし

又同會にしは今回規則改正と共に看護學の教授を完全ならしめん爲め講師の外同會を卒業したる左の人々へ助教を囑托することゝ爲りし由

新島八重、弘藤弘子、綾野壽子、鳥海若榮、廣瀨達子、河武春子、廣瀨郁子、中山ゑい、花輪金志野、中野やゑ、雨森すゞ子、富永たけ、村岡久野、大澤幸恩、楢幸子、河島信子、近藤定子、關口しけ子、

●兒童恐怖心の調査

米國マッサセット州に

て、九百六十二名の幼童幼女に就き、其の最も、恐怖するものを調査せしに、女子は概して、人類を怖るゝが如し、即ち、醉漢を恐るゝ、男子は十七名なるに、女子は五十名、乞食を恐るゝ者、男兒は、四十五名にして、女子は、七十九名、幽靈妖怪を恐るゝ男女共に二十七名づゝありしと。醉漢乞食の徒たるや、一は常識を失し、一は德義の心乏しきがゆゑ、如何なる無法無作法の擧動なきを保せず。兒女の恐るゝも、亦宜なり。而して妖怪を恐るゝ者の却て、少きは、是、國民一般の智識の進みたる兆證と謂つべしと或者もかたれり。

●獨逸の女子教育

（教育公報に見えたる下田次郎氏の通信中より）

○當地の女子は、日本に比して、啻に身體の大なるのみならず、擧止活潑にして、而も優美なり、歩調早くして、男子に劣らずいづれも、かひ／＼しく健康に見受けられ候、子供の遊びは、女子も男兒と、殆ど區別なく、雪ふり始むれば、小さき橇に乘り、男女入りみだれて、土手往來の區別なく少しく傾斜したる地ならば、何處にても滑り、學校放課後の仕事は、殆ど、これのみに御坐候、又、河池の氷るに至れば、（當地は攝氏零下二十度に降る事あり）男女を問はず、大人も子供もシュリット、シュー、即ち、氷滑り靴をつけて、氷上を滑り、これを、唯一の樂と致候。

○當地にて女子の竹馬に跨り、鞦韆に乘ることも屢々見受け候へども、此等は一考を要すべしと存候、女學校の體操も、なか／＼活潑にて、梯子にさがりて、上下し、金輪にさがりて、前後に動搖し、或は三尺位の鐵棒持ちて、體操いたし候、これにても知合の米國人は、まだ不活潑なりと申候、國内少しく人口の稠密なる所には、野外に公共の運動場（スピール、プラッツ）屋内には、體操場

(ツルン、ハルレ)ありて、場内に體操機械を備へ居候、以ていかに國民が體育に注意するかを推知するに足るべく候

○獨逸の高等教育を受けたる婦人に、ギョーデ、シルレルの話のできぬものなし、又音樂の嗜なきもの少く、當エーナの如き、人口二萬に足らざる小市にても、一週數回の演奏會有之、毎日の新聞に、その廣告を見ざる事なく、街道を行けば、至る處ピアノの聲を耳に致候、又しば〳〵科學上、文學上の演説ありて、婦人の傍聽するもの多く、學校以外に女子の品性を高め、知識を扶植するの道開け、我國の如く、學校卒業が行止りには無御座候、女子の生活多趣にして、娯樂の範圍廣くして高し、女子にして大學教授の意見を一通りは心得、其品評をなすもの下宿屋のおかみさんにも有之、興味の向ふ處、自ら我國と異なるもの有之

候、次にお世辭の甘き事驚く許にて、丸で煙にまかれて挨拶に困る事有之、文化の進むに從ひ、感情の表出細かになると、スペンサーの説は、この邊の所を申すにや。

○婦人にても、秩序を立てゝ生活し、時間を空費せず、來訪談話等の時間をも定め居るも、不尠、訪問を約して何時何十分と申せば、其時までには、屹度まゐり候、我國にても、無用の長居長談義を廢し、仕事の時には邪魔入らずに働き、休息の時間は、餘事を忘れて、遊戯笑談するやうに致度、今日の如く、仕事するでもなく、せぬでもなく、晝夜の別なく、グツ〳〵に日を暮すは、國民の健康上、業績上、非常の不得策と存候。

教の庭



七月五日兼題　烈婦栗女の傳をよみて

地　肥後國下益城郡松橋町　松橋輝子

つかへたるその身はみづのうばふとも
なみならぬ名はよにながれけり

人　廣島市堺町壹丁目　瀬良千代子

いく度かくりかへしつゝ身にとめて
おのかこゝろのまもりとはせん

（以下原稿到着順）

天はおちくがはさけなんときまでも
みちにまよはぬはゝぞたふとき　福原重子

一すぢにつかへまつりしまこゝろを
ふみのはやしにかけてみるかな　友永章子

みなぎりし文まきがはのしがらみに
のこるはきみがほまれなりけり　那須昌子

栗の實はよしおつるともはなの名は
千とせもちらでかをりぬるかな　中山常子

なき人のうらみもさぞなはれぬらん
あだにつくしゝきみがまごころ　黒田明子

おぼれてもつくすみさをは顯はれて
すゑのよながくのこるいしふみ　黒田美津子

眞こゝろを盡すみさをはいく千代も
その名はくちぬかゞみなりけり　虎口資子

おほ水に身はおぼれてもつくしたる
みさをは千代のかゞみなりけり　下田龜子

むらさきのくもゐににほふ栗子やま
かたきはきみがいさをなりけり　山田稻子

君こそはかひのくりけのこまならで
くものうへまでなをやあげゝん　萩原章子

かねてよりちかひしみさを守りなん
よしまがつみにみはほろぶとも　椎野ぬき子

ひとすぢに夫にかゞへしまこゝろは
ことはのはなにあらはれにけり　椎野秀子

まがつみも夫のやまひもいとふまじ
みさをのみちをたどるこのみは　椎野薫子

まがつみにあふもみさをゝ破らじと
たゞひとすぢにまもるみちかな　椎野清子

もろともに身をあた波となせしより
とゞろく名こそ世々にながるれ　藤井りゑ子

たとへ身は水泡となるとも流れての
世にあふれけりきよきみさをは　河野みち子

野もやまもうつもれはてゝあら波に　牧躾子

敎の庭

人の子のおもきを負ひしまことこそ
きみがみさをはあらはれにけり　日高かず子

たゞふべき方たにもなくかゞはしき
やがてはゝそのかたみなりけれ　森このゑ子

あめ風をしのきていよゝいろそひし
あはれその名はくちせざるらむ　大橋衆子

をやみなきあめに色香のあせやらぬ
やまさしまれのをみなへしかな　大橋伊與子

ちれはさて名はけがさしさ淸き香を
このなてしこのこゝろをゝしも　岡本松野子

をのこにもまさろこゝろの玉なしも
世にのこしたるひめ百合のはな　岡本蔦乃子

山くゑてつちにうもれしのちにこそ
くたきてたてしきみがみさをや　永井さい子

これの女のふみしまことの道はこそ
いよゝまことはあらはれにけれ　田代綾子

八千くさに立ましれさもをみなへし
よの人のおやのかゞみなりけれ　田代鶴子

なつかしき栗のはなるへなつの米て
ひとりけたかくちりにけるかな　仁保基子

ひと筋にたてしみさをはたぐひなく
なかめせしまにちりはてにけり　德永滿壽子

雨にぬれかぜにたゆますひとすぢに
代々のをみなのかがみなりけり　德永廣子

おほ水になかれはてゝもわがつまに
みさほただしきをみなへしかな　佐々小學子
たてしよき名はしづまざりけり

はらからになさぬ兒なれば産の兒に
かへじとみづのそこにたちけん　佐々有鄰子

夫のためかはのもくつさなりし身は
名こそながれて世にきこゑけり　山根久子

やまかはの神はまさぬかひとみなの
をしむくりのみなみにしづめつ　河合綾子

まこゝろのはなもそのみも三つ栗の
なかにすくれてきこゑけるかな　三宅中抜子

三つ栗のなかのひとりものこりなく
しつむもあはれかひのやまかは　服部蔦子

夫と子をたすけむと思ふかひもなく
ひさめのみづにおぼれけるかな　服部正子

やの河のさかまくみづにおほれても
しづみはてめやきみがみさをは　加藤鶴子

水くきのあさみるそでもぬれにけり
なみにしづみしくりのみさをに　伊東千代子

栗の木のつひにたふれしやまかはに
なみだもそひてなかれぬるかな　伊東以佐子

うもれ木になりにし栗のさしをへて
にはのをしへに名をそのこせる　早川穗子

山かはのきしにすくれしくりのはな
ちりてながれてにほひぬるかな　鍋田龍子



七月五日兼題

朝顔

天　長野縣北佐久郡布施村　中澤千野子

露深き賤か垣根に、自つから咲きかゝりたる、哀れもことに深きや。露のまの詠めよと思ふにも、いと惜しく、かつは、朝いがちなる身の、花はづかしう、今朝こそ花より先にと、朝戸あけて見出せば、夜をこめて咲きやしけん、はや三ッ二ッ、露なからゑみこぼれたる、姿の凉しさは、さながら、愼しみ深き女子の、つとめて起き出でゝ、髮けづり身を清めたらんやうなるに、朝日すが／＼しうさわやきぬる、げに名にたへる朝顔よ。露にみかける花の面にうつらん身こそ、いと恥しけれ。あはれ、此の花よ。朝な／＼色新らしう咲くからに、日影またあへず凋み果つれば、いとあかすはかなき心地すれど、空せみの世の榮を貪らず、朝露のしはしを我世と、心淸くも消え行くぞ、かの足るを知るてふ理りさへ悟り顔なるに、況して、世の花の日をふるながめに色あせて、散りぎはむづかしうなり果つるにひきかへ、同じ花の、再び世に見はやされぬは、貞女の操高きにもたくへつべく思へば、ゆかしさもなつかしさも、亦一きはになむ。花に置くなる露の身も、消えんばかりの夏の日のいぎたなき朝いのまどに、いさめ顔なる露の一輪、いかに心地すが／＼しうなりゆくよ。かかるめでたき花ながら、はかなきものは、あたなるよとかこたるゝは、見ん人々の、心の露の置きところにこそ。

地　和泉國泉北郡深井村　福原瓊子

夏のあしたは身もすが／＼しく心浮き立つに、此の項はまして、庭の垣根にはひゝろごりし朝顔の二つ三つひらきそめしめざましさ、露の姿の誰れかはいうに優しと思はざるべき。殊に此の花や日影まつ間の盛りにて、異草の花の如く一つ色もて、長きさかえをむさぼらす、朝毎に紐ときかふるてふ其のけなげさやまとをおのごの心にもたとへつべく、いとも床しく、あかねこゝちのせらるゝは此の花になん。

人　香川縣高松市八番丁　長谷川はる子

ほのぼのと、あけ渡りたる朝ぼらけ、淸らなる露をふくみて、すが／＼しう咲き出づるは、朝顔に

なむ。さるは、此の花、草も木もおなじ緑に茂り合ふませのもとに、あるは白、あるは紅、あるはゆかりのにほひ美しう、いづれ劣らぬゑみの眉打ち開ける様げに目さむる心地して、筆にも言葉にも、えつくすべうもあらずかし。朝な顔な、色わらためて咲きにほひつゝ、露のひぬまのさかりなるこそいともわかぬ心地せらるれ。されど、又思ひかへすやう、其のはかなき間のながめにぞ、なかなかに、見所はあめる。ことぐさのごと、色香のあするまでのこりたらむには、いかでかくしもめでらるべき。朝ごとに紐ときかへて、つゆけげなる姿の、いうにやさしきは、誰かは、あはれと思はざらむ。日かげやうやうのぼりぬれば、はやくもしぼみがちなるをもて、朝とく起き出でゝ、ながめざらむには、この花のさかりは見るてといとかたしや。されば、あさいする身のいさめ草なりと、さる人のいへりしは、げにことわりとこそ思はるれ。まことにたのもしき、あしたの友や。

（以下原稿到着順）

伊東芳子

世に花てふ花は多かれど、朝顔の如く、はかなきは、またあるまじ。かよわき蔓にて、庭の垣根にはひまさひ、手びらの如き葉おひろげ、朝まだき漏斗の如き花をつく。そのはなに赤きあり、白きあり、紫あり。班なるあり、へり取りさてへりのみ白きあり、また近頃は、西洋朝顔さいふもの来れり。みないづれも美しく、蜂の是れより彼へ、彼より是れへさとびかふもゆかし。さるを朝日さしそへ、漸く中天にかゝらむさすれば、あはれはかなくも凋みおさろへ、朝のゆかしき姿をみせず。やよ朝顔よ。今しばし命ながらへたらむには、めではやす人も多かるべきに、あはれたのみすくなきは、この浮世なるかな。

鈴木かね子

暁の夢もいまだ見果てぬに、雞の聲のふさ眠をさましたれば、早や、月も西の山に影おち、ほのぐさ東の空の白み渡りたる明方の空の霧ふかきに紫の戸おしあけ、ふさ朝戸出を思ひたちたるに、中垣の朝顔の、こくうすく、自がじし朝露うけて咲きいでたるさま、げに似る者なくめでたし。折しもあれ、さしのぼる朝日の影まばゆく、をかしさめてつるも束の間にて、朝顔のうつらなんさする様こそ哀れなれ。實に、露の命をたのみにて、うきふし繁き呉竹の籬にまつろひて、あさなぐ、やさしく咲きいづるもつれなき世になつるふかさおほにて、いさ、心苦しうなん。

河原芳子

朝なぐに咲きかへてさ古人のうたひましけん朝顔ほど、めでたくあはれふかき花はあらじ。さるは、あさいする身のいさめ草さもではやされて、塵の汚れもしらぬしのゝめの空清う、つくろはぬ垣根ながらはひひろごりたるが、紅に、白に、あるは紫に、咲みだれたる、鉢などにものして一本いかめしう咲かしめたるより、なかぐに趣ふかく、そよふく風にはらぐさこぼるゝ露の玉は、ないも、はれぬ色に匂ひて、一しほにあはれを添ふるものから、いさもぐをかしう心やらるゝまゝ、口もそゝがで、

はかなしと誰かいひけん露ほども
　うき世をしらぬ朝顔のはな

と打吟じたるを、きゝしる人のありけるや。

原　婉子

春の花秋の紅葉いつれはあれど、夏はしのゝめの朝顔見るこそ、いと心ゆくものなれ。隣のうなゐの數よむ聲に、なかしかりし夢よりさめはてゝ、咲きにけらしなと遣戸かいやるほど、月はありあけにて光をさまれるものから、影さやかに池水にうつりて、朝のみならず岸の朝顔に一しほの風情そへたるなど、なか〳〵、をかしき睹なり。大きやかなる花に、蝶のねふれる、さながら、蒔繪にせまほしきや。さては、簪の紅鮮に似て、莖のよりよりと垣つたへたるなど朝に來ん友のまたれてなむ。

横山てふ子

朝まだき、妻戸ひらき見れば、籬の朝顔赤き靑き濃く淡く咲き出でゝわれは顏なり。露をおびて、打ちゑめる姿のおむかしさ見る目もいとすゞしかりけり。さはれ日かげ待つ間の程もなくあたらうつろふ、あなはかなしや。あはれ、此の花をめでてん人は、朝疾く起き出でずてやは。實に朝顔こそ朝いいさむるをしへ草なれ。いさゝかおもふふしかいつくること、かくなん。

財田富子

朝な朝なに咲きかへて、と古へ人のうたひけんも、げにうべなりけり。曉告ぐる鐘の音に夢を破られ起き出で庭に下り立てば、垣根にまつはる朝顔の、三つ四つ、淸らかなる露を葉末に結びて、朝風のまに〳〵そよ〳〵とそよめくさま、いと心もすが〳〵しう覺ゆるに、程もなく、横雲のたへまより、さす日影の高くなるにつげ、露さへひぬ間にしぼみ果つてるぞあはれなる。されど、水打ちそゝぎなどして、涼しき夕まぐれつぼみのやゝ色づけるが、葉かげにもれ出でたるなつかしさいはん方なし。かゝる折は、さらでも短き夏の夜さへ、待ちわぶる心地して、あくる朝戸の急がれてなむ。

瀨良千代子

あはれなるとのゝ一つに數へられたる、朝顔の露に後れぬ命こそいとはかなけれといふ人のあれど、夏の朝の涼しきうちに、疾く起き出でゝ、其の業を勵まんとはせず、徒にねむり貪る人には見せじとの花の心ならむと思へば、いとゆかしき心地す。ある朝、目覺むる儘立ち出でゝ庭の面を眺むれば、有明の月かすかに空に殘りて鳥さへいまだ塒をはなれざるに、垣根の朝顔は、はやくも露を帶びて、淸く美しく咲きいでたるを、見るにつけてもおのが寢くだれ髮の姿、いと恥かしく〳〵。

白岩艶子

朝日待つ間とはかなみ、咲きかへてと、愛でんは古めかし。いでや、植物學研究のかたはし、汝があさいのいましめにもと、父君の御手づから、庭の籬垣に、うつし植ゑ賜りたる二葉の苗、梅の實の黄ばむ頃には、垣もせにはひ廣ごりて、朝な朝な、露の干ぬ間の花盛、あるは、白き赤き、あるは、ゆかりの色薄く濃く、いろとりたるなど、得もいはれず美きに、自ら花に後れしとの、心も出で來て、推しあくる月、常にも似ず、早うなりにたるも、實に父君の賜なりかし。凡て、かゝるさゝまかなる花のするにゝ、雌雄の別ちありてゝいと微妙なる、さようによりて、實を結ぶときゝつるまゝ、今はなかなかに、群り來る、蜂の類もにくからず。あるは、一つの花にうすばりして、こゝろ見などしつるも、早や去年となりぬ。市にあきなふ鉢の朝顔、見るにつけても、故郷の、垣根のしのばれてなん。あわれ、今年も、父君の培養し給へりや。いかに。

岡田柳子

有明の月かげおぼろに山のはに殘れる頃より、色あたらしく咲きいでゝ、又なくうるはしきは、朝顔になむありける。其の色のけだかく床しきは更にもいはず。吹風の、そよ〳〵と蓮の葉わたる夏のあしたの心地よきに、まいて、とり〴〵に、咲きいでたる其の樣や、げに似るものなくて、打見る袖にも、結べる露の玉ちるなど一しほの風情なり。そゝ此の花よ。いかなればか、茜さす日の光りをまたで、しぼむにか。且口惜しう、思はるは。さても此の花の心をしらざる故にやあらん。とく咲きて、しぼむはてりはたゝく、日中の暑さに、あはじとの心ならんか。あな、いさぎよき花や。只うるはしきのみかは。年毎にあれたる庭に咲きいでゝ己がつとめを怠らざるを。あわれ、我はた女子と生れたらむには、たふる限りは、をみなの道をつくさでやはあるべきと、朝な〳〵さきかふる花を見て、思へるふしをかくはつゞりぬ。

松尾富美子

千種の花の數はあれど、朝な〳〵咲かへて、垣ほににほへる朝顔そいとなつかしけれ。露を帶びて、清げなる姿は、養ひし人の心を迎ふるににたり、我が種まきし朝顔の二葉出づるを待ちわびて灌漑時により、つちかひ養ひまがき結びて、すがらせ、蕾の數のまさり行くをかぞへ樂しむ心つくしや如何ならん。花の紐解く朝ぼらけうれしさみるほどもなくしぼみ行くはかなさ、實に榮枯盛衰は無常なりけりけり。されば又こん年に形見止むるは造化の神の惠も、いとどうれしかりけり。且、培養のよしあしにより花にけじめあるとかや。此くの如きは、たゞ草木の上のみかは。

佐々有鄰子

蒔つる園の朝顔の、時しりがほに、まがきのもとに、明日のこゝろがまへを、夕日の影落ちかゝるころより、みつよつふたつ、鹿の巻毛の筆のごとく、背葉のかげよりぬけいでゝ、露をふふめるさまの、なつかしく、立よりて袂にすらまくおもへど、つら〳〵考れば。幼稚の苔を、心なくつみとりなば、明けての朝は、いかに盛の花を、人にほこらんものをと。心がまんしかひながらんかと、おもひかはして、學窓のもとに立かへり、朝顔の花さきいづる。明朝を、まつ身こそたのしけれ。かく筆のすさびも、都の友たちに、つげまゐらせんとてなん。

宇高松子

夏の、朝とく起きいでたる斗り、心すが〳〵しきものはあらじ。ましてよべ、水そゝきながらよみ置し蕾の數にはまして、朝露にきほひて咲ける朝顔の花の、らうたげに色の美しげににほへるは、ねぶたき目も、とみに醒むるこゝちして、實に似るものもあらじかし。きく、都の入谷といへる里よりは、これの培養を業とする人數多ありて、色の千種はいふも更なり、形まで、異樣に作り、珍らしく咲かせて、人にも見せ鉢にも植ゑて、ひさきなどもすとかや。いかに、めでたかるべし。されど、又、賤が破れ垣にはひひろごりて、誰つくるとにはあられど、自から色あざやかに咲きにほへるを、朝とくそゞろありきの序などに見出たるも、なか〳〵、哀れに捨てがたき風情になん。

佐藤保子

姿は、幼き時より、友とはふほどのものをもたず。さて何をかなしと考へけるが、ふと花にしかじと思ひ付きぬ。それより、くさ〳〵の花をうゑ、朝な夕なに、學びのひまには打ちながめ、こよなう、うれしくめでうつくしみき。中にも朝とは、己が、此夏の初めつ頃蒔きつけしが、何時しか芽を出し、やがて葉やうの、つるをのばして、竹垣、或は立てる樹草のきらひなく取りすがりて、己がじはひはびこり、花咲き廣ごりぬ。いともあ

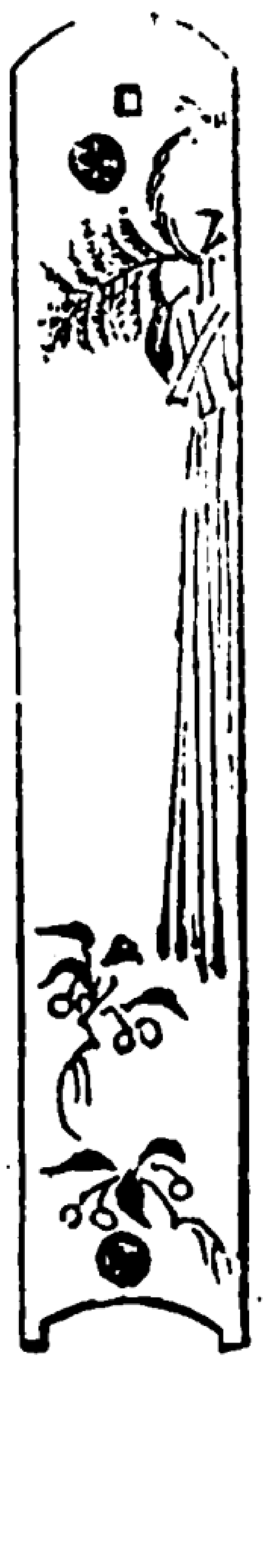
てやがにして、やさしき其の色の、かず〳〵ある中に、くれなゐなるあり、紫のこきあり、うすきあり、あさぎなるあり、白きあり、まだらなるあり、ふちのみ白くて他は赤きあり。其の他琉璃なるあり。はたしぼりなるも、斑の所々に、あらはれたるもありて、其の花の形も亦、一樣ならず。いともくすしくあやしかり。妾は、毎朝、此の花におくれじと、とくおき出づれど、いつもいつもゑみを含み、白露をのせ、旭の昇るを待ちつゝ、妾が目ざむるを、待受けてなん。其の美くしさ、ゑもいはず、いと〳〵めでたし。世には此の白露を、朝顔の命とやとなへ、さかり短かきをかこつめれど、果して、短きか、長きか、何によりて定めけん。咲くべくして咲き、榮ゆべくして榮ゑ、散るべくして散る。何をもてか短かしとやいはん。誠に、妾等か命を百年とし、究みなき、あめつちの齢にくらべなば、なにかは、朝顔の花のみ、さかり短かしと云ふべけんや。ふと思ひつけるまゝを、かいつゞりてかくなん。

大谷津稲子

あはれ朝顔よ。あしたに露をおびて、いと艶に、愛らしう、咲き亂るゝも、束の間にて、昇る朝日に果なくも、しぼみぬる。あはれ憐れとはあれど、まだきに、ゐや立ちいでゝ、朝風のいとすがしきに餘念もなう、つゆを含める芝生ふみしだきつゝ、ありき廻れば、庭の面のなでしこ百合など、ゑみそめたる、こなたの垣に露のめぐみを受けて、いや生に、おひ榮ゑ、くさ〴〵の色して、咲き出でたる、朝顔よ。中々に、すてがたう愛らしう、しばしたゝずみて眺むれば、折しもひむがしの空より、立ち出る天津日かげに、たちまち、しぼみぬるこそ果敢なけれ。人も、一ツの事をなしとげんとするに、はづかのとに心くぢけて、なし得ざるものあり。さあらば、心なき草花にまでさげすまれんと思へば、いと口をしう、はら立たしう、やをら、家に入り、文机にうち向ひ、後のいましめ草にもと、かくなむ。

田山芳子

和氣靄々の中に朝餉をすまし、姉と庭に逍遙すれば、祖父の種子蒔き、耘り、丹精こらしゝ朝顔、垣根に絡り、赤白絞などこきませて、美事に咲きいでたり。此方の鉢植なるはちりめんとかや。とりわけてうるはし。こはいぬる年。父の都に上りにし時、祖父の好めばとて、家づとにせられたる種子なり。これに弟が意匠凝らして、梯子を作り、蔓をたよらしめ、頂に彼の消防夫の遠見する樣そなへつけたる、面白さに「朝顔も梯子つたへてひの見かな」とよしなしごと誦するもいとおかし。やがて學校より歸り、いちはやく庭に出れは、こはいかに、花は皆萎みて、はかなくなりぬ。あゝ朝顔よ。なは、いかに薄命短きことよと、姉上に告くれは、さればとよ。俗諺にも朝咲いて四時に凋るゝ朝顔の花と、實に麗しき花咲き朝日さすまに凋るゝも露、うらむるけはひなく、みむすぶ。これ朝顔の徳とする所なり。花盛り永くも、實の一だになきあだし草とは異なれり。これたゞに草木のみならんや。妾等人たる者も亦然らん。百歳の生をなすも、なす事なくば、獨歸少うて露の命と消ね果つるも、世のため一かどの事をなし、名を擧けたる者にしかめや。五條三位の歌に「さきてこそ散るとも散らめ一時もあなうらやまし朝顔の花」とあり。よく〳〵思ひ知られよと。



總目錄

樂園

文林

教の庭

短哥三千二百三首
長哥其他六十四首
文　九十二章
雜報　數千件

兼題

歌	文	
新年雪	新年祝言	（二〇二）
早春鶯	ゆかしきもの	（二〇三）
遠山霞	紀元節	（二〇四）
歸雁	野遊	（二〇五）
硯	養蠶を勸む	（二〇六）
花有遲速	小學を卒業せし人におくる文	（二〇七）
惜花	山吹	（二〇八）
田家卯花	靖國神社に詣づ	（二〇九）
梅雨晴	田植を見る	（二一〇）
六月大祓	子規を聞く	（二一一）
樹陰納凉	朝がほ	（二一二）
瀧	苦熱の詞	（二一三）
氷	避暑	（二一四）
寄海祝	臺灣戰記を讀む	（二一五）
早秋	友を悼む詞	（二一六）
[illegible]草	月を見る	（二一七）

總目錄

總目錄

口繪

口畫

附錄

毎月二回
三日、十八日發

國光

本誌定價
一冊金拾錢
十二冊金壹圓拾錢
郵税不要
郵券代用一割増

第百九拾六號

明治三十三年七月三日發行

本誌綱領

○皇道の大義を恢弘し、國體の精粹を顯彰す。
○士風を勵まし、品性を敦うし、勤儉力行の習効を擴充せしむ。
○國家教育の改善を圖り、及び、其の要義を説明す。
○政治、法律、經濟、軍事等の各問題を講評し、正義の伸暢、富強の增進を期す。
○世界列國の商工業、及び、教育軍事等の情況を稽査し、國民をして觀感振起せしむ。
○宇內列國の形勢を審查し、東亞大陸の經綸を指示す

發行所 東京京橋區築地二丁目廿一番地 (電話新橋八八) 國光社

●●●●新刊廣告●●●●

日本教育

菊版
全一册

定價郵税共金貳拾五錢
郵券代用一割増

從來教育に關する學術的の解説及訓練管理の細目を詳述したる著書は多けれども**國家の特性**本質に鑑みて**國民養成の大綱**を示せるものは甚乏しきが如し**本書**は此の**缺乏**を補はむが為に**我が日本の教育**といふことにつきて論述せるものにして當今教育界に於ける諸國**流行**の**寄せ集め**の弊を**矯め**以て**邦家**千載の**教育主義**を**明**にせむとするものなり

目次

發行所
東京市京橋區築地二丁目廿一番地
國光社

至急廣告

本社發刊の『國光』『女鑑』御愛讀の諸君中御轉居の節は往々現住所のみ御通知相成候に付取調上甚だ困却且つ行違ひ遲延等の不都合を生し爲めに御迷惑相掛け候事も有之候間將來は**現**御住所**前**御住所とも詳細に御通知被下度此段廣告致置候

國光社雜誌部

國光、女鑑に關する御照會、御通知、御送金等は以後國光社雜誌部宛に御願申上候

社告　女鑑每月五日、廿日、發行

定價		
一冊		拾錢
六冊	（三ヶ月分）	五拾五錢
十二冊	（半年分）	壹圓
送料		全國無遞

代金　通貨又は郵便小爲替、銀行爲替及通[illegible]便にて御拂込の事 拂込は、郵便爲替、拂渡局は東京[illegible]富町郵便受取所、受取人は東京築地貳丁目廿一番地國光社宛、郵券代用 割増

領收　別に領收證を出さず金員領收は上直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるる方は別に證書郵送料又は端書封入の事

照會　編輯上に關する件は「東京市京橋區築地二丁目二十一番地國光社編輯部宛」、會計上に關する件は東京京橋區築地二丁目二十一番地國光社雜誌部宛照會は返信用切手封入若くは往復葉書にあらざれば回答せず◎未納料の來書は一切受取らず

廣告料

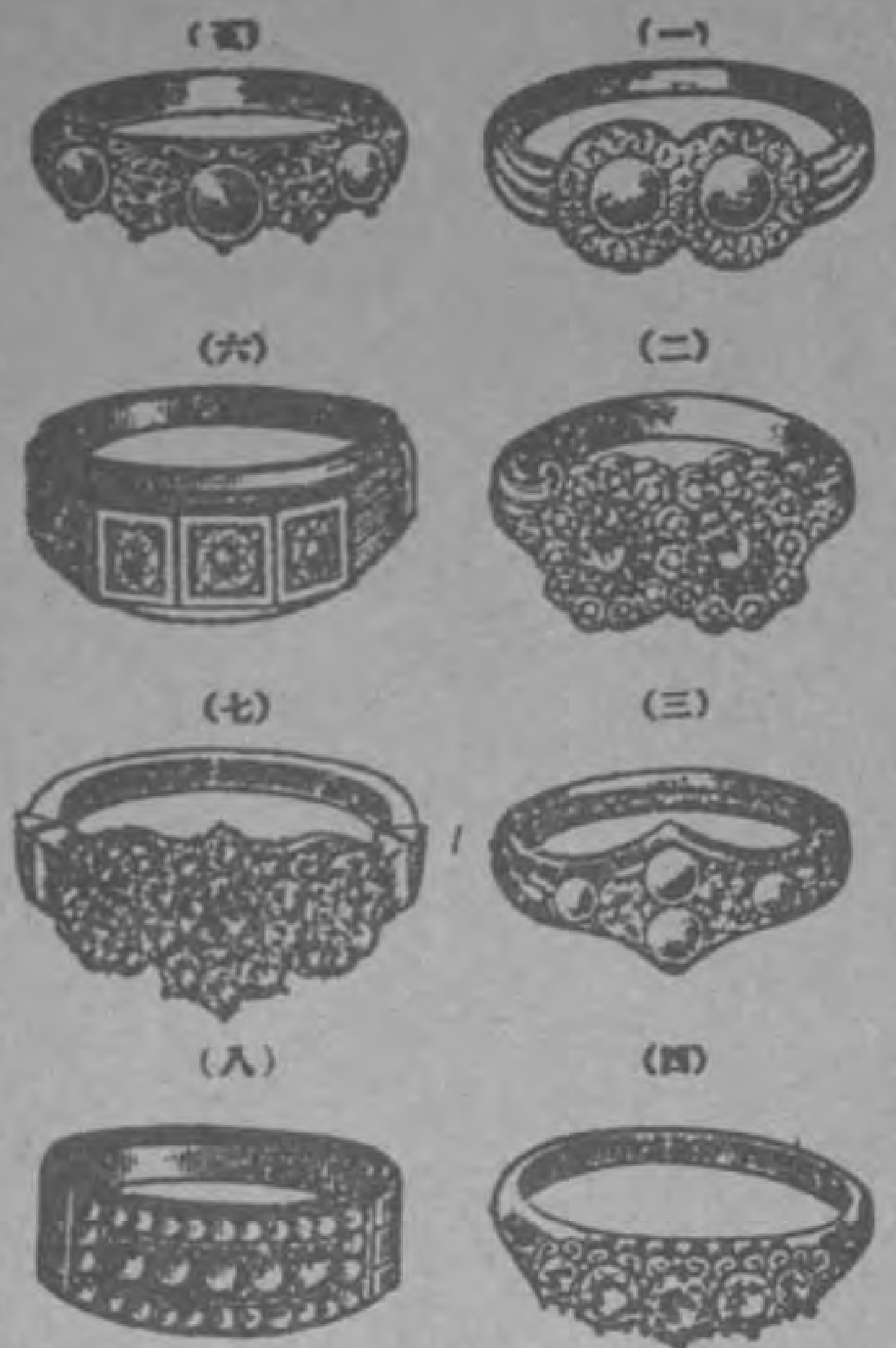
一行	（五號活字廿三字詰）	金二拾五錢
半頁	（一行三十詰）	金六圓
一頁	（二段六十行）	金拾圓

料金は前納、位置は申込の順により組み込む

明治三十三年七月四日印刷
明治三十三年七月五日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衞
印刷人　東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木良雄
發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　特（電話番號新橋八八）國光社

寶石入指環



（一）ダイヤモンド及キヤツアイ入甲價八拾五圓●乙價七拾五圓●仝眞珠及チパール入甲價參拾參圓●乙價參拾圓

（二）ダイヤモンド入甲價參拾圓●乙價貳百八拾圓

（三）ダイヤモンド及眞珠入甲價百貳拾圓●乙價百圓

（四）ダイヤモンド入甲價貳百圓●乙價百七拾圓 ダイヤモンド及エメラルド入甲價百五拾圓●乙價百貳拾圓

（五）ダイヤモンド及キヤツアイ入甲價貳百圓●乙價百七拾圓●仝ダイヤモンド眞珠入甲價百八拾圓●乙價百五拾圓

（六）ダイヤモンド入甲價百八拾圓●乙價百五拾圓●仝ルビー及サツフアヤ入甲價五拾圓●乙價四拾參圓

（七）ダイヤモンド入甲價五百圓●乙價四百參拾圓

（八）眞珠入甲價參拾圓●乙價貳拾五圓

●市外遞送料金貳拾錢

此ノ外金又ハプラチナ地ニ種々ノ寶石ヲ[illegible]シタルモノ及影刻品夥多有之候間御來車ノ上現品御一[illegible]下サルカ郵便御注文ナレバ寶石入若クハ影刻付等ノ區別ヲ指示シ代金御送附アレバ其價ニ相當ノ品ヲ精撰シテ調進スベシ若シ御意ニ適ハザル時ハ御購求當日ヨリ一週間（舶來商品中時計ニ限リ三十日間）以内ハ（府外ハ相當ノ往復日數ヲ加フベシ）凡ソ其物品ニ破損或ハ毀傷ナキニ於テハ何時ニテモ需ニ應ジテ他ノ物品ト交換シ又ハ原價ニテ買戻シ聊カタリトモ其爲ニ手數料若クハ割引等ヲ加ヘサルベシ其他ノ手續ハ屢々各新聞紙ニ廣告スル所ノ弊堂店則ニ詳ナリ

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地
（電話番號新橋三百三十三）
（長距離電話番號新橋三百三十三大阪東七百卅三）

時計及寶玉類
貴金屬美術品商

天賞堂



妙技一等牌賞

東京神田小川町（電話本局二一六〇）天賞堂小川町出張所
橫濱尾上町五丁目（電話八七六）天賞堂橫濱出張所
大阪心齋橋北詰（電話東七三三）天賞堂大阪出張所
名古屋市玉屋町二丁目 天賞堂名古屋出張所
廣島市大手町三丁目六十五番地 天賞堂廣島出張所
熊本市上鍛冶屋町十番地 天賞堂熊本出張所
長崎市今鍛冶屋町四十番地 天賞堂長崎出張所
福岡市橫口町榮屋方 天賞堂福岡臨時出張所
北海道小樽色内町越中屋方 天賞堂小樽臨時出張所

（明治二十四年八月四日内務省認可 明治二十五年十一月十二日遞信省認可）

（東京市京橋區築地二丁目株式會社國光社印刷部印刷）